

大東高校校地拡張に伴う発掘調査報告

すみ た
角田遺跡・又下遺跡
また げ
付 大東高校グラウンド遺跡他資料

1988年3月

島根県

大東町教育委員会

序

島根県立大東高等学校の校地とその近辺は、大東高校グランド遺跡・輪の内遺跡、織部遺跡等、周知の埋蔵文化財包蔵地を含んでおり、また、出雲國風土記には隣接する加多社の記載がみられ、古くから私達の祖先の生活の場であり、この地域の文化の中心地として重要な地点であったと推察されますが、文献には極めて恵まれず、その歴史的全貌は未だ曖昧模糊としている現状です。

従来から、大東高校の校地拡張工事が計画される度に遺跡調査が行われており、校地内で発見された土器はいわゆる「大東式」と呼ばれて土器編年の一指標となるなど、この地点の考古学的価値は注目されているところです。

この度の校地拡張・環境整備に伴い、この地の重要性にかんがみ、本調査を実施しました。この調査によって「大東式」の内容や斐伊川中流域唯一の玉作遺跡としての特色等がさらに充実したものとなるよう、過去の調査資料を東森市良、蓮岡法暉、勝部昭、宮沢明久の各氏から提供していただき「大東式」を総括することができ、この遺跡群の全容を収録することになりました。先人の文化的な営みが幾分なりとも解明されたものと思います。

この調査結果が適切に活用され、大東高等学校の誇りを更に高揚する一助となるよう願うと共に、町民はじめ広く社会の方々の文化財保護の認識を深めるものとなることを念じます。

おわりに、本調査にご指導、ご協力をいただいた島根県教育委員会、貴重な資料をご提供いただいた上記4氏や土地所有者、近隣の方々に、厚く御礼申し上げます。

昭和63年3月

大東町教育委員会

教育長 野々村 安生

例　　言

1. 本書は、昭和61年12月及び昭和62年3月～6月に実施した、島根県立大東高等学校校地塗張工事に伴う又下遺跡及び角田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、大東町土地開発公社からの委託を受けて大東町教育委員会が実施した。昭和61年12月に試掘調査を、昭和62年3月から6月まで発掘調査を行い、その後遺物の整理と調査成果のとりまとめを行なった。
3. 調査の体制は次の通りである。

調査主体者	大東町教育委員会　教育長　野々村安生			
調査指導	島根県教育庁文化課	宮沢明久	松本岩雄	卜部吉博
	蓮岡法暉	(八雲中学校教頭)		
調査担当	杉原消一	(島根県文化財保護指導委員)		
調査補助	藤原友子	(三刀屋町)		
事務局	大東町教育委員会	岩出　寛	松田　勉	田中英光 翁野　弘
作業員	糸原勇雄	曾田和治	松村忠義	若槻善高　川本勝義
	岸野米一	森山トメ	原田友子	高島治子　春木美美子
	高島道子			

4. 遺構・遺物の実測・整理は調査者が行なった。出土遺物はすべて大東町教育委員会に保管する。
5. 当該遺跡に関連する大東高校グランド遺跡・輪之内遺跡の調査資料を、調査関係者である東森市良・蓮岡法暉・勝部昭・宮沢明久の各氏から提供を受け、本書に参考資料として掲載した。記して謝意を表します。
6. 本書の編集・執筆は調査者が行なった。なお、挿図中の方位は原則として調査時の磁北を示す。
7. 調査にあたって次の方々から援助・協力を得た。記して謝意を表します。

大東町土地開発公社　加多神社宮沢宮司　県立大東高等学校
福間忠良　渡部慶二　川北公民館

目 次

序 文

教育長 野々村安生

例 言

I. 調査に至る経緯と経過	(松田 勉)	1
II. 位置と環境	(杉原清一)	3
III. 調査の遺跡	(杉原清一)	7
A. 角田遺跡		7
1. 調査の概要		7
2. 造構		11
3. 遺物について		12
4. 小結		27
B. 又下遺跡		29
1. 調査の概要		29
2. 造構		30
3. 遺物について		31
4. 小結		46
IV. まとめ	(杉原清一)	48

付編 関連遺跡資料

I. 大東高校グラウンド遺跡	蓮岡法障	51
II. 輪の内遺跡	勝部 昭	54
III. 大東高校グラウンド遺跡出土遺物…東森市良 宮沢明久	蓮岡法障	55

挿図表目次

第1図 位置図	2	第18図 須恵器	25
2 周辺の遺跡	3	19 砥石・玉未製品	26
3 調査地点尖測図	5	20 又下遺跡トレンチ配置図	29
4 角田遺跡グリッド調査図	8	21 土層断面図	30
5 遺構図	9	22 遺構図	31
6 9ライン断面図	10	23 遺物包含層断面図	32
7 石組柱穴	10	24 S区遺物出土状況	33
8 土器出土状況	10	25 N タ	33
9 層次別出土遺物数	13	26 区別出土遺物数	35
10 繩文土器・石器	15	27 須恵器(1)	36
11 豊形土器(1)	16	28 タ(2)	47
12 タ(2)	17	29 土師器	40
13 器台形土器	19	30 その他の土器	41
14 高環形土器	20	31 その他の遺物	43
15 注口・把手・小形丸底壺等	22	32 砥石・玉未成品	44
16 底部	23	表 角田遺跡出土遺物集計表	13
17 施文破片	24	表 又下遺跡出土遺物集計表	35

付編 挿図目次

付図1 輪の内遺跡遺構図	54	付図5 タ(土器)	57
2 タ 遺物図	54	6 タ(タ)	58
3 大東高校グラウンド(土器)	55	7 タ(玉未成品)	59
4 タ 遺跡出土遺物(タ)	56	8 タ(タ・他)	60

I 調査に至る経緯と経過

県立大東高校は、明治20年大原郡高等小学校が設置されて以来、農学校、高等女学校等と幾度かの変遷を経、昭和23年県立大東高校として現在に至っている。

その後、昭和24年から逐次施設の拡充のため校舎の増改築やグラウンドの拡張が進められてきたが、島根県教育委員会は今回さらに体育施設の充実をはかるため格技場の建設とグラウンドの拡張計画が策定された。

島根県教育委員会は、施設整備を早期に実現するため、昭和61年9月大東町土地開発公社に用地の先行取得と造成の依頼があった。

このため、当大東町教育委員会が大東町土地開発公社から委託を受け、用地造成に先立って埋蔵文化財の確認調査を実施することとなった。

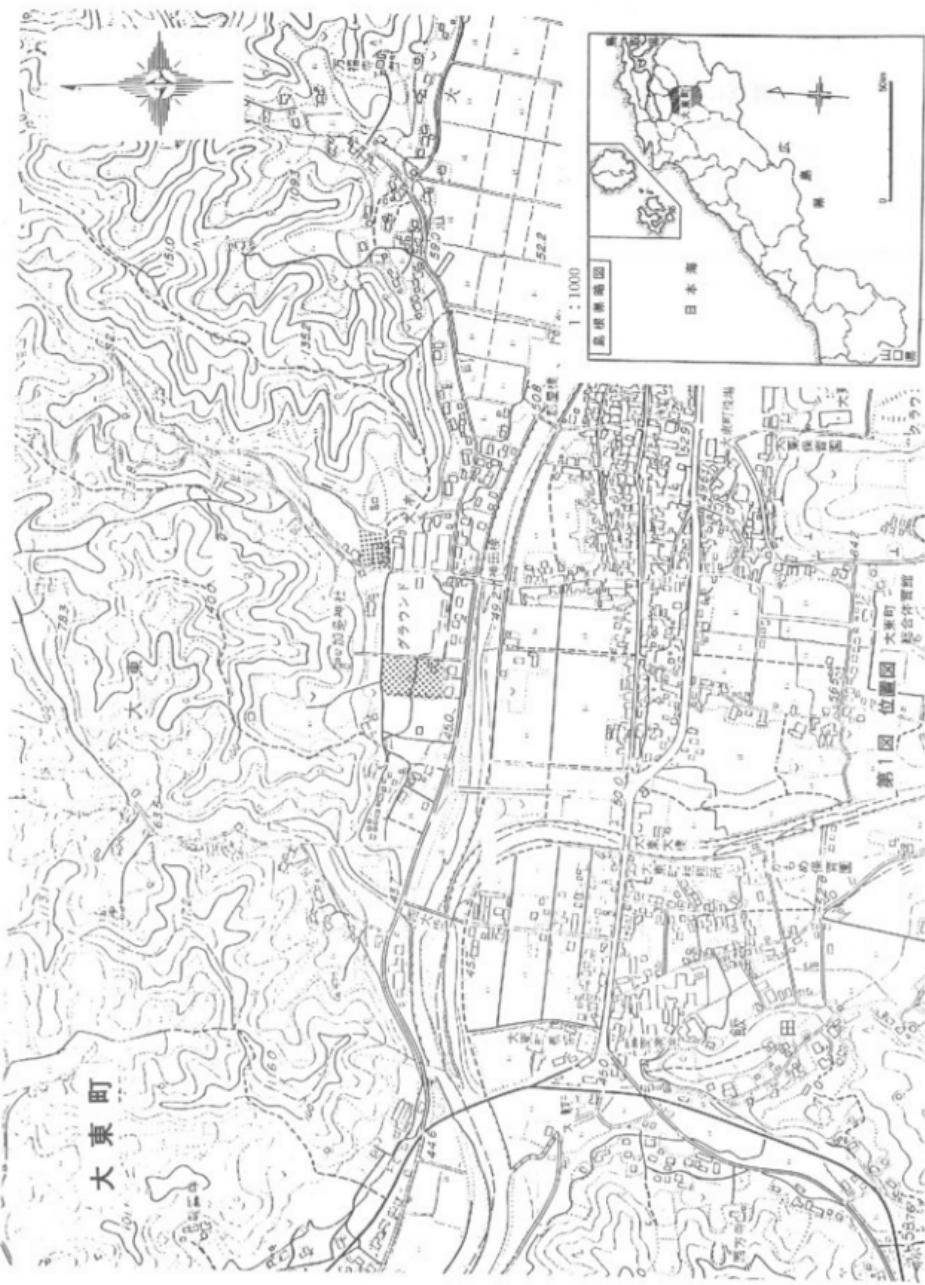
調査には、担当者として島根県文化財保護委員の杉原清一氏に依頼し、昭和61年12月8日から同月22日まで遺跡の有無及び範囲の確認をするため、グリッドとトレントを設け試掘を行うこととなった。格技場予定地は、大東町大東（字又下）38番地1,194m²、グラウンド予定地は、大字大東（字角田）20-1番地外9筆5,890m²で、格技場予定地は校舎の北側隣接地、グラウンド予定地は現グラウンドの西側に位置し、両方とも水田で、過去に土地改良工事が行われている所であった。

試掘調査により、両調査地において古式土師器ほか多数の遺物が確認されたため、文化庁に遺跡の発見通知を行い、遺跡名をその地名から格技場予定地を「又下遺跡」、グラウンド予定地を「角田遺跡」と呼ぶこととした。

このため、県文化課からこの遺跡の取り扱いについて指導をうけ、又下遺跡は昭和62年3月10日から4月10日まで、角田遺跡は昭和62年5月13日から6月25日まで発掘調査を行った。この発掘で又下遺跡では高环や玉類等玉作に関与すると推察される遺物が多数発見された。一方角田遺跡では土師器片を主体とする遺物と調査地の北側で遺構の一部が発見された。特に、角田遺跡の北側には出雲国風土記に記載される加多神社があり、ここは後に宇多・醍醐両帝の祈願所となつたとも伝えられる由緒ある社であり、この地域が古くから人々の生活の場であったことが推察され今後の課題も大きい。

従って、又下遺跡はその状況から記録保存とし、角田遺跡はグラウンド造成工事の工法を一部変更し柱穴遺構部を盛土して現状保存することとした。

以上の経緯であるが、今回の調査には過去の大東高校グラウンド遺跡と輪の内遺跡の調査記録が調査の指針となった事は勿論、この報告書に当時の調査記録を掲載させて頂くことにより、この遺跡の全体像を総合的に把握する便を図つたつもりである。



Ⅱ 位置と環境

角田遺跡・又下遺跡は、島根県大原郡大東町大字大東・織部字角田20-1番地及び字又下380番地に所在する。

この2遺跡は、ともに大東町中心部の町並みから赤川を挟んで対岸にあたり、南面の丘麓に立地する。

大東町は出雲地方のはば中央にあたり斐伊川の支流赤川の中～上流域を町域とする標高50～700mの中山間地である。西を除く三方はいずれも山陵をもって町界をなし、西は赤川の流下に沿った沖積地である。町の中心部は赤川を中心に小盆地々形をなし、その沖積地帯に水田が掘かれたところである。

大東町の歴史は今のところ縄文時代後・晚期ごろまで遡ることができる。しかしそれは若干の出土石器によって知られるのみである。

弥生時代も中期になると、主として赤川沿いのかつての氾濫原であったあたりに営まれた集落跡が認められる。これが古墳時代以降までも存続する。そして古墳時代の後期には、ほぼ現在の大東町の原形が形成されたものとみられる。町内の古墳は後期に属する小円墳であり、横穴も多い。また攻玉遺跡が赤川北岸域に点在して注目されるところである。

奈良時代には町域の西端近く、大字仁和寺あたりに都家が置かれ、新造院も建立され、やがて町内各地に多くの荘園が登場してくる。



第2図 周辺の遺跡

た「天平6年(734)出雲国計会帳」に記載のある「大原郡屋裏郷加多里」も、加多神社を中心とするこの地帯であったと思われる。

以下付近の遺跡について概観する。

大東高校グラウンド遺跡(3)及び輪の内遺跡(46)は当該2遺跡(87・88)の丁度中間にあたり、現高校グラウンドのほぼ中央に位置するもので、当該遺跡と続き地でもあり密接な関係をなすものである。この遺跡は、昭和27年校庭造成工事によって発見され、昭和48年拡張工事に際し発掘調査が行われた。明確な造構は発見されなかったが、玉作関係遺物や弥生式土器・土師器・若下の須恵器が検出された。土師器は「大東式」と、この遺跡名をもつてするものなどがあり、また斐伊川中流域の玉作遺跡として広く注目された。なお本書には、関係各氏の提供を得てこの遺跡に関する多くの資料を掲載(付編)した。

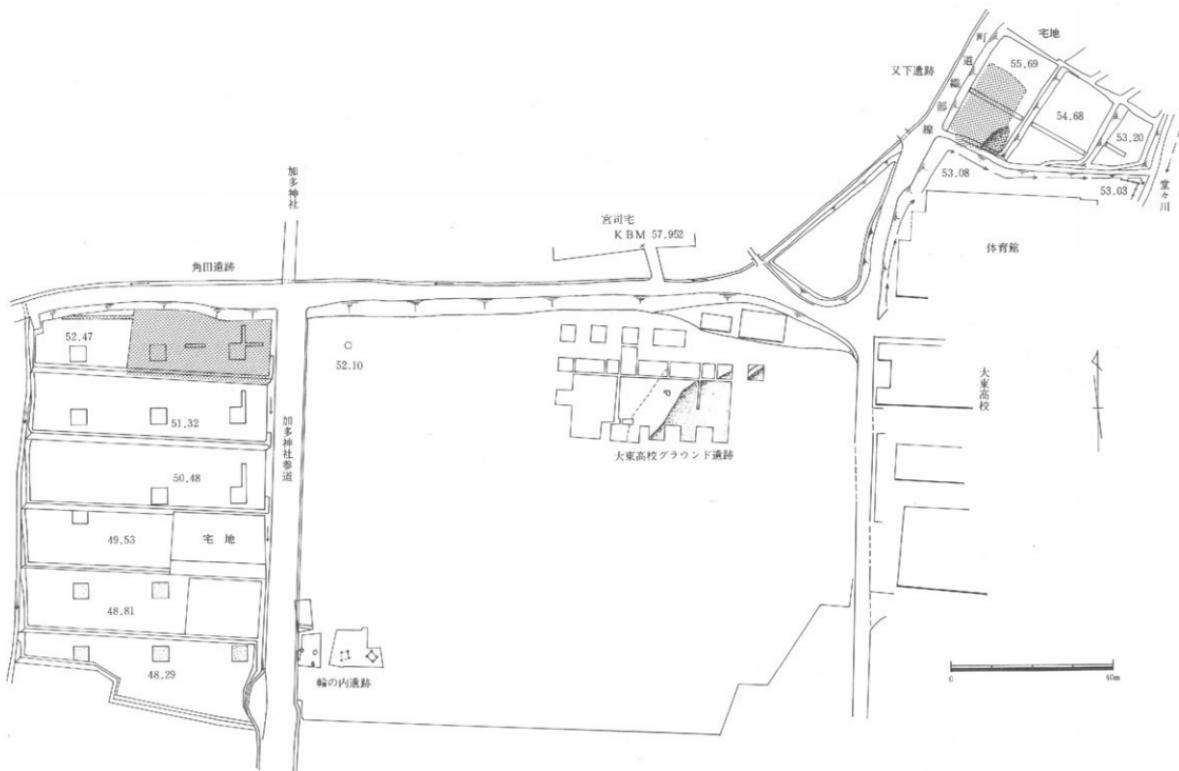
このように以上の4遺跡は「出雲國風土記」所載の加多神社の麓に集中していることになる。

この地から東へ約400mの字中城子の山麓(47)では、乳棒状石斧が数少ない縄文時代遺物として出土し、またこの近くで弥生時代の環状石斧が採取された。東約1kmの字田中の山裾近く(45)に、井戸掘りに際し地下約4mから弥生時代後期の土器片が倒木等とともに出土した。この二者の中間あたり丘陵端には諏訪殿古墳群(18)があって、小円墳5基が知られ、内1つは小型箱式石棺を主体とするものであった。これに近く鞍馬寺横穴(17)1穴があったが消滅した。また(45)の田中遺跡に近く小屋ヶ市横穴群(19)があったが、これも消滅した。

東方約2.4kmの大字新庄地内では、鏡神社の横に宮尾古墳(15)があり、直径約15mの円墳で主体には石組みが予想されているが未発掘である。さらにこれと尾根続きの丘陵上には平古墳群(16)の小円墳がある。

これら古墳群の丘麓にあたる字横枕(44)の水田部分には遺物散布地がある。昭和38~39年水田の区画整理作業で、弥生式土器・土師器・須恵器などの土器とともにメノウ製勾玉や石匙が採取された。また碧玉・メノウの剥片も出土し、攻玉遺跡かとされているところである。

このように通観すると、弥生時代後期から古墳時代後・末期へかけてのこれらの遺跡は大きく織部・田中・新庄の3地区群に集約される。そしていずれも北から大東盆地へ向っての大きな谷の開口部に位置し、その立地には共通性が認められる。特に攻玉遺跡かとされる横枕遺跡は、当該2遺跡との類似性が思料されるところがあり、そしてまた当該遺跡は、山陰地方での玉作の拠点である八束郡玉湯町玉造からは峰を越して南へ10kmの旧往還沿いの地点にあたる。



第3図 調査地点実測図

III 調査の遺跡

A. 角田遺跡

1. 調査の概要

角田遺跡は大東高校グラウンド遺跡の西約100m、加多神社参道脇の水田である。先年圃場整備工事がなされたところであり、その際どの程度攪乱されたのか、遺構・遺物の分布と残存状況を先ず把握することとし、昭和61年12月8日から16日まで、地籍図の方位に従って20m方眼点毎に $4 \times 4\text{ m}$ グリッドを設けて試掘調査した。

その結果北から南へ下る5段の水田のうち、最上段の1田区に遺物包含層が認められたが、遺構は明確ではなかった。また第3段の田区から下(南)方はすべて砂土の堆積でありかつての河道であったと推定された。そして圃場整備工事によって厚く盛土された部分が多く、地形も大きく変わっていることが推察された。

この結果を踏まえて、工事計画の校庭面レベルを基準に考慮し、遺物包含層の比較的浅く厚い第1田区の東半分について、昭和62年5月13日から6月25日まで全面発掘調査した。

作業は工事によって盛土された部分については重機によって耕土し、そのうち $2 \times 2\text{ m}$ 方眼区によって発掘した。

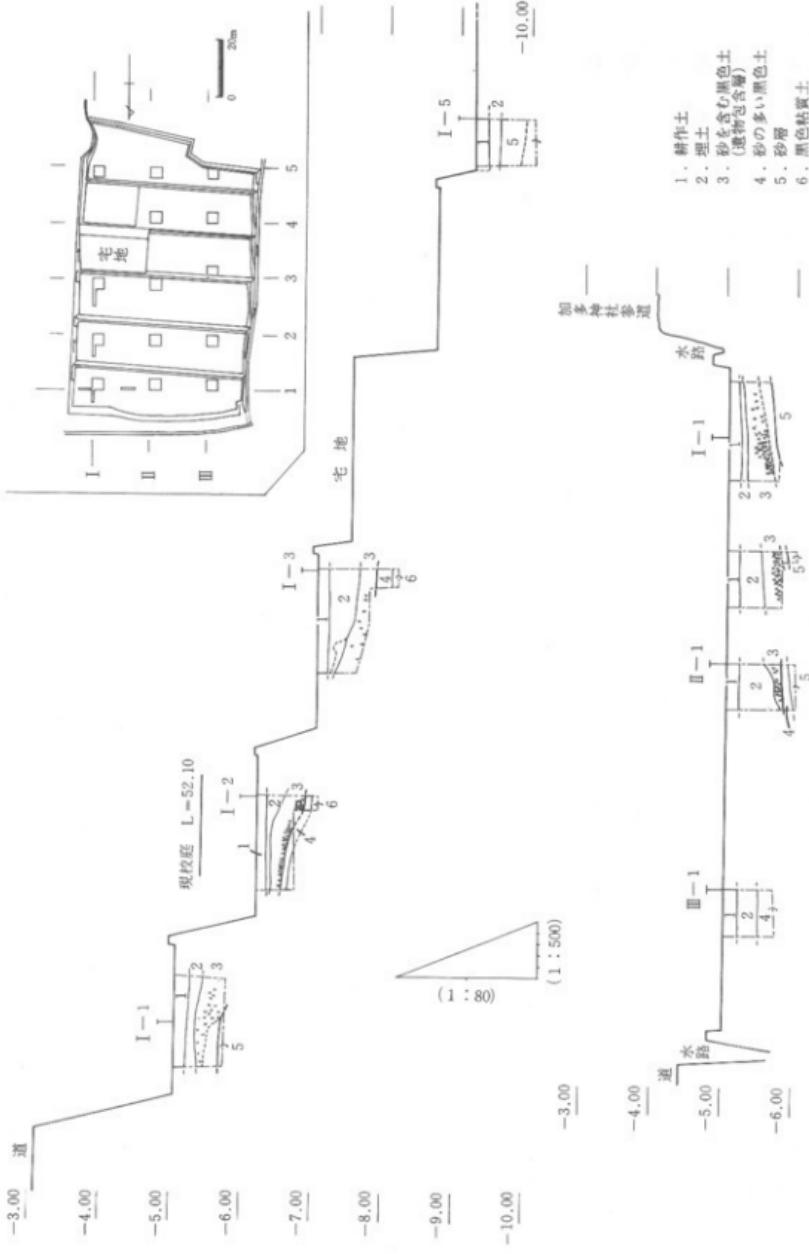
調査の基準高は隣接する現グラウンド面より30.0cm高い標高52.40mとした。なお、これは昭和48年度の大東高校グラウンド遺跡発掘調査のK BMである宮沢宮司宅石垣点からは-5,552mに相当するものである。

土層断面についてみると第5・9図のようである。水田耕作土の下は近年の圃場整備工事による盛土部分が比較的厚く、その下に砂混り黒色土があり、部分によってはその間に下面近くに川砂の薄い層が断続している。さらにその下層は粗い川砂が厚く(1・3田区)堆積しており、部分的には粘質の黒色土(2田区)の堆積がみられる。また最下段の5田区は粗い川砂のみの単純層であった。

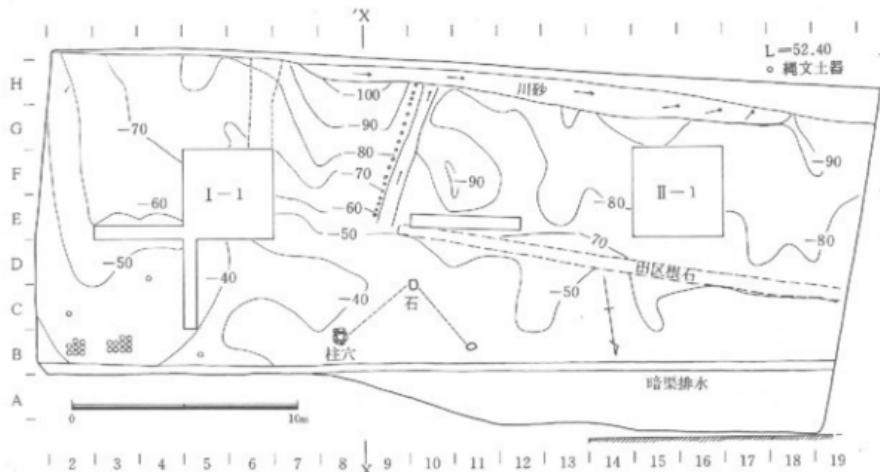
このうち砂混り黒色土層は多数の土器片等を包含する土層であり、概ね北東に厚く濃密で、南下するほどまた西へ寄るほど厚さも薄く密度も粗となる傾向であった。この状況を基に遺物包含層の厚く、遺物分布の濃密な部分である1田区の東から約50mについては全面発掘を行なった。

耕作土とその下の埋土を取り除くと石垣跡と軌列とによって区切られた3段の旧水田区画が認められた。

遺物は厚い包含層中に混在していることから、これをレベルによって層次的に取上げることとし、 $2 \times 2\text{ m}$ の区毎に基準高から-30cm、-50cm、-70cmの三次に分けて発掘取上



第4図 角田遺跡グリッド調査図



第5図 遺構図

げを行なった。因みに第三次の下面是工事計画の校庭面から-40cmのレベルに相当する。

その結果、北の丘麓に近い部位は一次のみで、下方の基盤砂層に至ったが、南に向って下降するもので、南端では三次まで行い得た。なお、旧水田はこの遺物包含層の上部を削平して拓かれたものであることを確認した。

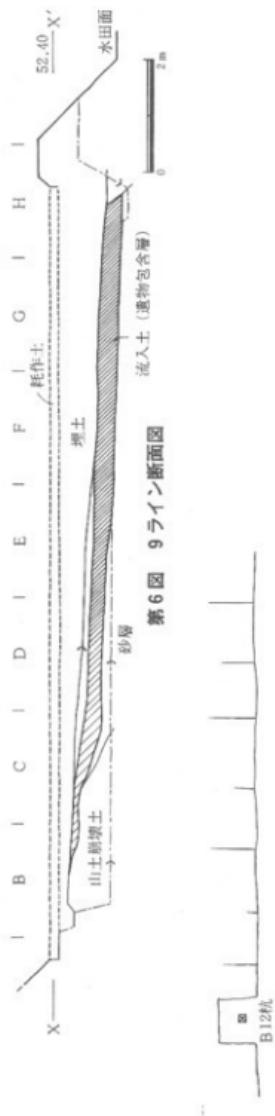
遺物包含層を取り除いたあとは、ほとんどが黄白色の砂質～砂土で水流によって運ばれ堆積したもので、その凹凸からみて麓から南の赤川へ向って流下する筋状のわずかな起伏が連続する地形であった。

このような状況の中で、北側山寄り近くB 8～11、C 8～11区内において、一部遺物包含層をベースに石組み遺構と、その付近に山石2個が転在した。全区通じてこれが唯一の遺構である。

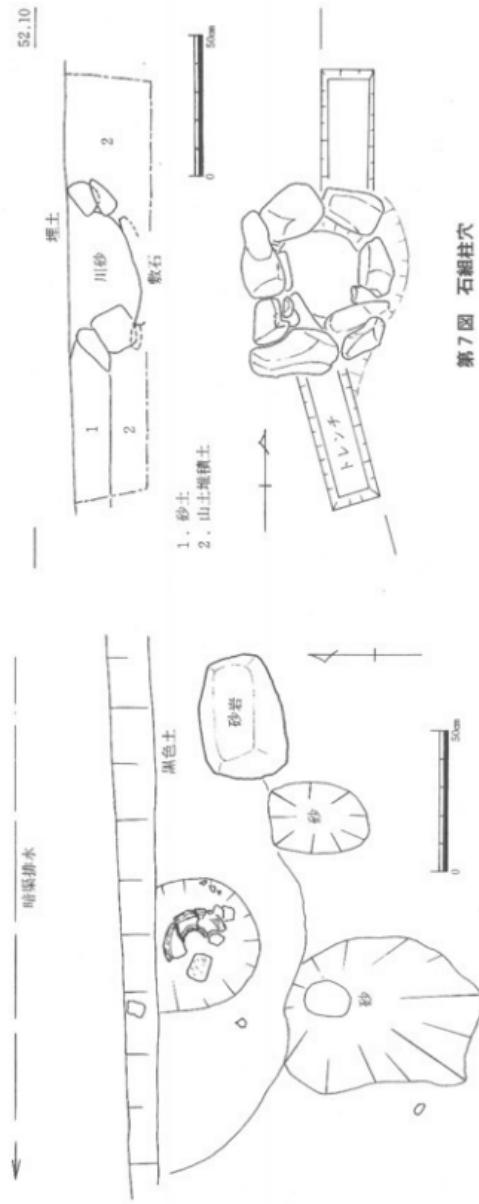
出土した遺物は総数約24,000点で、そのほとんどが土師器で、若干の縄文式土器と石器、弥生式土器があり、また砥石や玉未成品や剝片などの攻玉関係のものが認められる。須恵器は極く少数である。

これらの遺物の散布状況は包含層の厚さにもよるが、より以上に基盤面のわずかな起伏に関係しており、凹入部に多い。

土器片は細片が多く、器形の判断できるものは少ないが、弥生時代後期後半からの古式土器器が多く、煤の付着した破片や高环・鼓形器台片もみられる。



第6図 9ライン断面図



第7図 石柱穴

第8図 土器出土状況

2. 遺構（第7・8図）

遺構としてはB8区に石組みがあるほかには明確なものは認められなかったが、この近くには据え置いたものかともみられる石が2個ある。

石組み（第7図）は北側山裾部から傾斜して張り出す褐色地山土層の先端で遺物包含層の始点の位置にあり、この流入砂質には還元されて青灰色を呈しているところである。掘り方は $70 \times 60\text{cm}$ のやや長円形で現存する深さは24cmほどである。掘り底に荒割石を $40 \times 30\text{cm}$ ほどの平坦な面を上にして敷き、 $23 \times 28\text{cm}$ の円筒部をつくるように周囲を中～小の山石で積み囲んだものである。状況からして、敷石をした柱根部の周囲を石詰めしたものと判断された。

この石組み柱穴に対応するプランの同様なものは見当らないが、付近のC10区とB11区とに流入砂上の下面近く転石状で $30 \times 40\text{cm}$ 程度の砂岩が各1個検出された。この付近にはこのような大きさの石塊は全くなく、何らかの遺構に伴なうものと考えられる。これを仮りに柱下の礎石とすれば、石組みから3.8mと4.0mの距離でほとんど直角をなす位置にあたり、レベルもほぼ近い。これが方形の1間×1間プランとすれば、残る北隅の1箇所は発掘区外で道路敷の部分にあたることになり、未確認である。しかしながら、この2個の砂岩はあまりにも風化が著しく、しかも流入砂土中であることから、山裾部等からの転落によるものであることの可能性も残るものであり、断定はできない。

この石組み柱穴は、遺物包含層の始まる位置にあり、この土層を一部掘り込んで造られていることから、この土層が堆積定着して以降の所産であり、伴出遺物は全くないが、中世かそれ以降の時期が想像される。

石組み柱穴や砂岩転石の近くには、大小の浅い擂鉢状の窪みがあり、粗い川砂とともに古式土師器の大破片が嵌っていた。この窪みは人為的なものではなく、水の渦流部にできるものに類似しており、例えば氾濫流によるものとみるのが至当のようである。

発掘区外の西側へ確認のため設けた横断トレンチで、約5mの位置に幅約60cmで南北方向の防堤状の石組み列が、水田耕作土の直下にあった。付近で伝えるところによると、この位置あたりに近世まで家宅があったところとされ、その宅地に関与する構造の一帯であったものが、その後の水田造成によって埋没したものとみられる。因みに明治22年調製の字切図では既に水田となっている。

発掘区のほぼ中央部を南に下る杭列に沿って水路跡とみられる粗砂で埋設した溝と、それが接続する南端部には、東西に走る同様の大きな溝がある。いずれも農業用水路であったとみられ、上記の字切図に示す田区に一致するものである。

また田区をなす石垣根石列からは明治33年銘の五銭銅貨（第19図13）が出土しており、

土地改良の時期を示す一つの資料といえよう。

以上のほかには遺構は認められず、緩やかに南へ傾斜する暗青灰色～黒色で粗砂の混じた厚い遺物包含層があり、その下面近く数次に及ぶ薄い川砂層が遺物を伴って断続していた。

さらにこの下方には、ところによって暗灰～黒色の汚泥質土やシルトが層状をなしていたが、遺物の混入は認められなかった。この状況から本調査はこの深さまでとし、それ以下の基層までは確認しなかった。

3. 遺物について

遺物は水田造成により攪乱された埋土中からも若干検出したが、大部分は厚い砂混り暗青灰色～黒色土層中に包含していたものである。この土層は地形に沿って南へ下降しながら厚さは薄くなり、第Ⅱ出区の耕作土下へと続くものである。

遺物出土の様相は、大まかに北から南へ緩やかに下降する3条の高密度帯が認められる(第9図)。これは主として複数の薄く重なった流砂層に伴っており、あたかも加多神社西脇の浅い谷間から流出し、南の赤川へと続くかのような状況である。採取した土器片はほとんどが土師の細片で、その破面は摩耗したものが多く、土砂とともに水によって運ばれ堆積したことを見ることで示すものと言えよう。

そして、遺物包含層の基盤の地形の小さな谷地形部分が遺物密度が高く、条状の分布密度となっていたのである。

採取した遺物についてみると次のようである。

発掘面積 560m² 出土遺物総数 24,064点

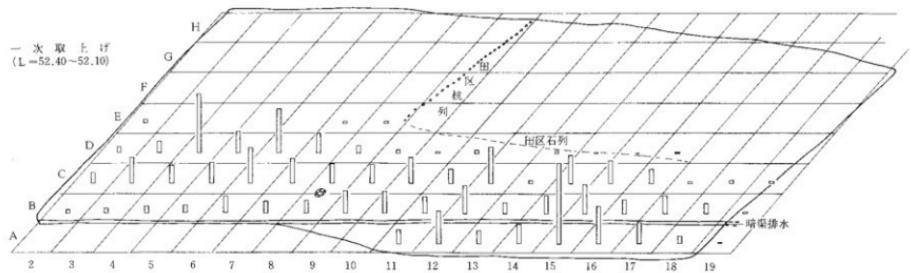
1 m² 当平均遺物数 430点

この遺物のうち大部分は甕又は壺形土器の細片かと思われる土師の細片であるが、特徴ある部分で判別し得る主なものは次のようである。

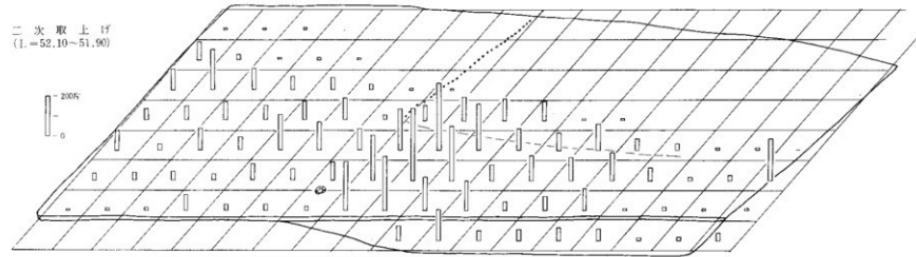
縄文式土器片	20点	石器(石斧)	2点
土師器 高環片	569点 (2.4%)	玉作未成品 メノウ	7点
器台片	234点 (1.0%)	タ 碧玉	27点
須恵器片	99点 (0.4%)	砥石	9点

1) 縄文式土器・石器(第10図)

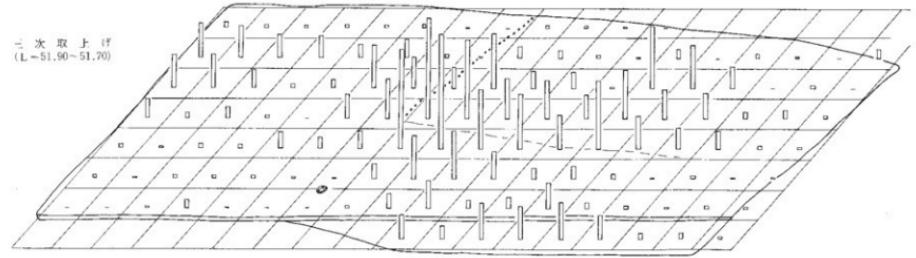
縄文式土器は主として調査区東北隅下層部分から検出した。すべて細片であり、接合し得るものはなかった。合計20点のうち精製土器は4点で、あと16点は粗面のものである。



二次取上¹⁹



一 次 取 上 (F)
(L-51.90~51.70)

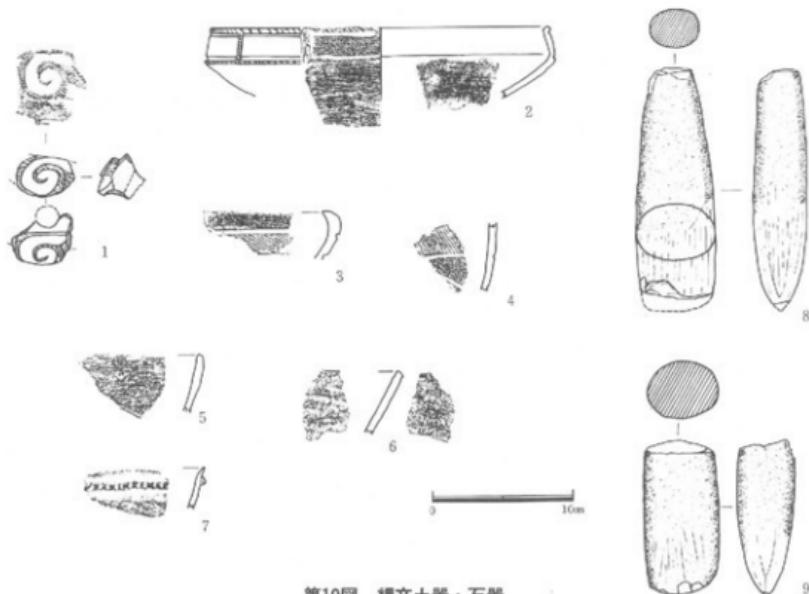


第9回 層次別出土遺物数

(1) は斜め上方に突出する瘤状の把手部分で、その基部に直径16mmの円孔があり、渦文に擬似繩文を施すもの。(2) は大型の浅鉢とみられるもので、体部との堀と口縁に沿って2条の狭い施文帯とし、これをところどころで垂直に接続するもので、大部分の面を磨消している。底部は不明。(3) は口縁を厚くして強く内寄して収めた磨消繩文の口縁部分である。(4) はその胴部片であろうか。(1~4) はともに擬似繩文を施したもので、いずれも内面は丁寧になでている。後期後半の権現山式に相当する。

(5・6) は粗製土器で内外面ともに粗面である。口縁に直立に近く、口唇は丸く收めるもの(5) とやや平坦にするもの(6) とがある。大まかに後~晚期のもの。(7) はやや粗製の深鉢形土器の口縁部分で、尖りながらわずかに外反し、口縁直下には貼付け凸帯に刻目を施したもので、晚期前半の黒土ⅡB式に相当する。

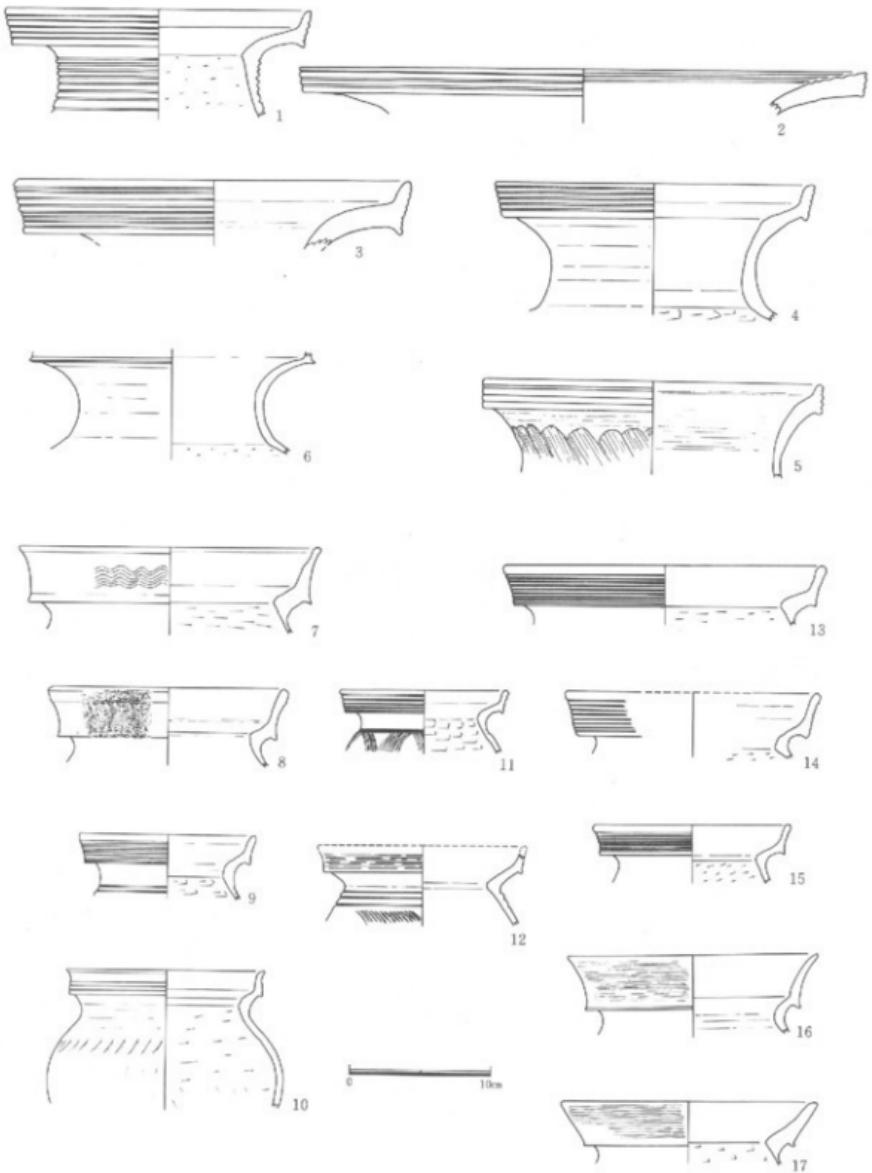
(8・9) は石斧で、青灰色やや粗粒質の安山岩を用いた乳棒状のもの。先端約3分の1を研磨した局部磨製である。土器と同時期のものかは判らないが、ほぼ同様にみてよかろう。



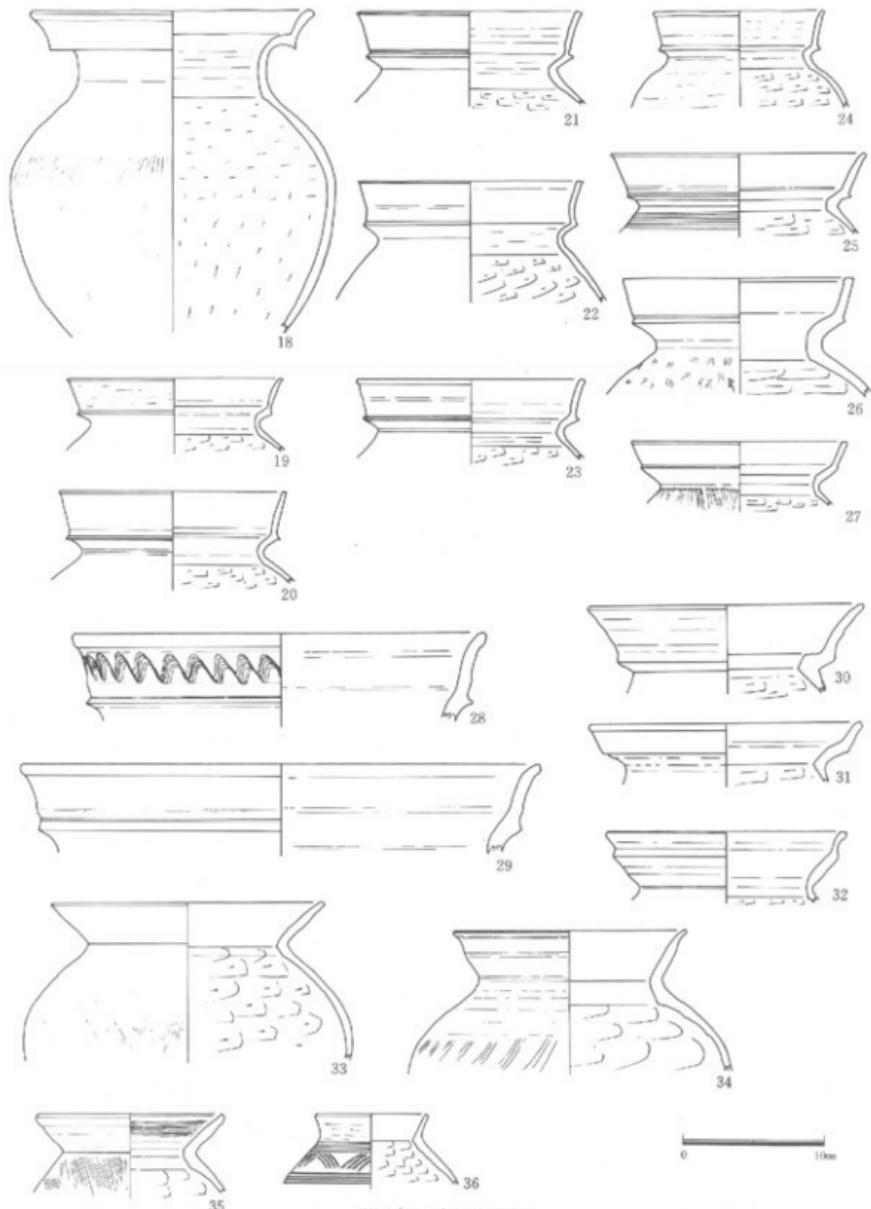
第10図 繩文土器・石器

2) 壺形土器 (第11・12図)

(1~6) は壺形土器の口縁部分である。いずれも凹線をめぐらすもので、(1) は頸部にも施されている。(2) は口縁が水平に近いほど強く開く大型品で、この2点は弥生中期後半



第11図 変形土器(1)



第12図 變形土器(2)

の特徴的なものである。

(3~5) は複合口縁がやや短く直立しその下端は下に尖るもので、肩部以下の内面は削り放し (4) で、頸には櫛状工具による斜め削り (5) のものもあり、いずれも弥生後期のものである。(6) は薄手の頸部片であり、時期は明確でないが…応ここに入れておく。

(7~17) は斐形土器で、複合口縁がやや開き、その下端は下方へ繰り下げたものである。口縁には櫛描波文 (7・8) のほかはすべて櫛描多条沈線をめぐらす。肩部に施文するものは二枚貝腹縁の刺突によるノ字文 (10)、ハ字文 (11・12) があり、さらに2~3条の浅い沈線を作り (9・11・12) ものがある。いずれも胴部内面はすべて削り放しのままで、胎土中の砂粒痕が顯著である。これらのうち (10) は口縁がほぼ直立して端部が外反気味に尖る点で異なり、(17) は頸部がほとんどほどに短縮するものとみられ、口縁部は厚く内面にアクセントのない形であることが異なるが、大まかにこの一群として収録しておく。

これらは口径12~22cm程度の小~中型器で口縁部から胴部へかけて煤が著しく付着するものが多く、煮焚用の斐形土器であり、(7~15) は弥生時代末期の九重式に、(16・17) は次の的場式に比定されよう。

(18~32) は複合口縁の外周には全く施文はなく、ナデ仕上げとしたものである。口縁下端は繰り上げの横方向に尖り (18~22)、(29~32) はその尖りが退化していく段階のものとみることができる。

(33~35) は口縁が単純にく字状に開くもので、器壁胴部にはわずかにハケ目調整痕が残るが、施文はみられない。(36) は単口縁ではあるが、上下の条線に挟まれて貝殻腹縁の刺突によるハ字状施文が引き継がれている小型品である。この一群は鍵尾Ⅱ式から縦内布留式併行の小谷式に至る間の土器である。

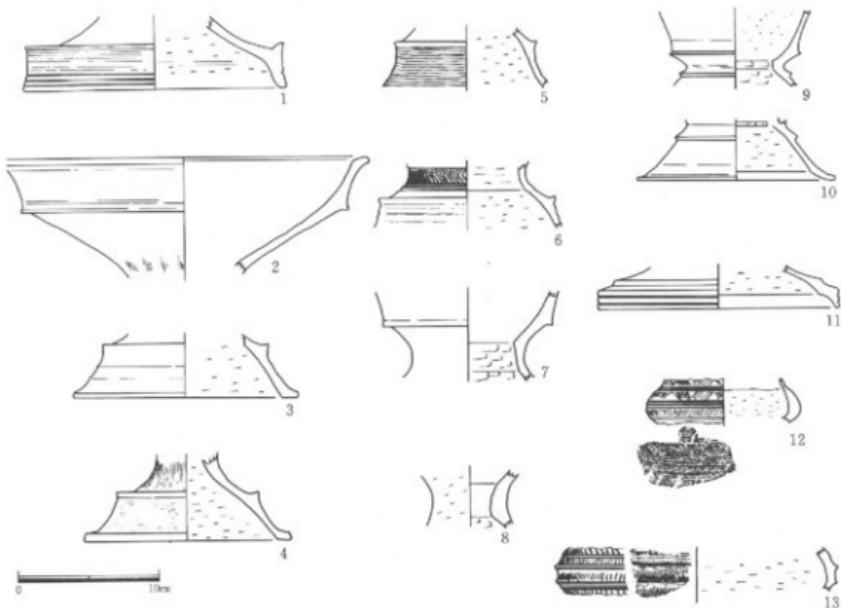
3) 器台形土器（第13図）

(1) は朱色塗料の付着する台部で直立気味に立つもの、櫛描線文はやや浅いが九重式に比定されるものである。

(2~4) は線文は認められないが、筒部は未だ短縮していない。(5~6) は筒部や台部に施文のみられる破片であり、(7・8) は無施文の筒部片である。いずれも強く短縮したものではなく、(2~6) は的場式、(7・8) は鍵尾Ⅱ式かとみられる。(9・10) は筒部の短縮したもので、小谷式まで下るものである。

(11) は内面を削り仕上げとした脚部片で明瞭な沈線をめぐらせたもの、器種は不明である。特殊壺の台部でもあろうか。製作からして的場式又はそれ以前かと思われる。

(12・13) はいわゆるタマネギ形の小型特殊壺の胴部片である。(12) は3条の沈線によっ



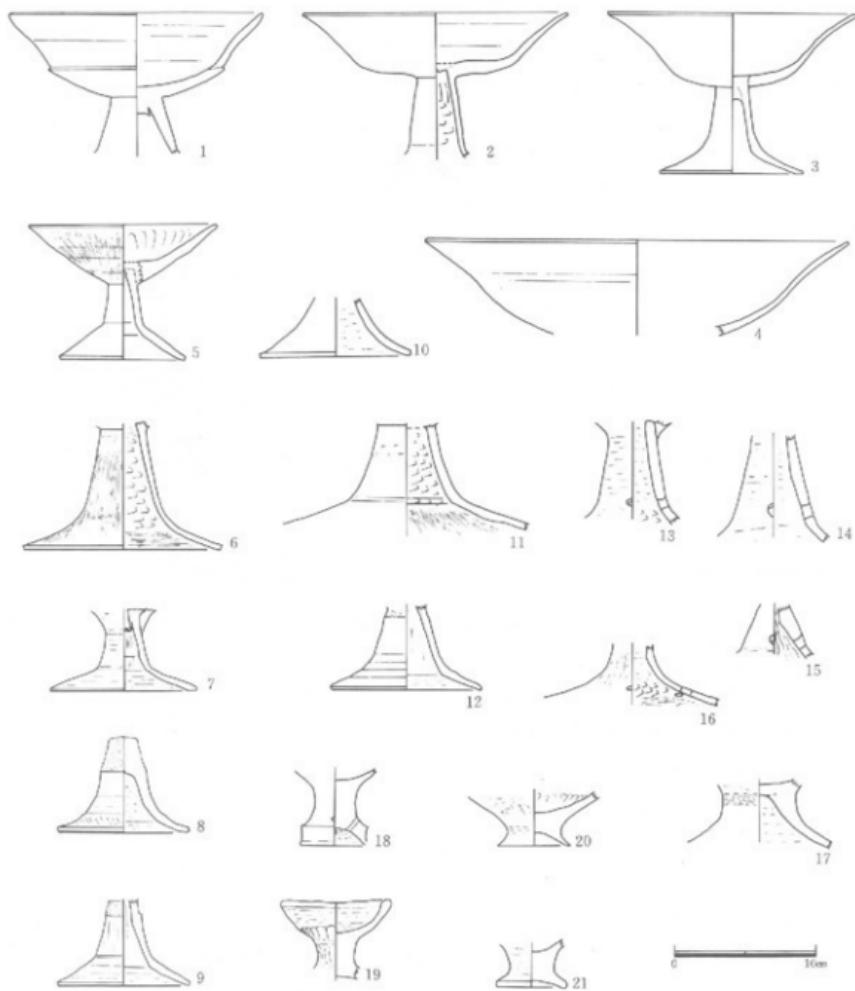
第13図 器台形土器

て区分された施文帯にヘラ状工具による擬似鉈文や斜行文を密に線刻したもので、線刻部分にわずかながら朱色塗料が認められる。(13)も同様のものであるが、2本の凸帯が付くもので、中央施文帯は爪形の線刻である。全体の器姿は不明であるが、脚が付くものと思われる。的場・鎌尾の土壙墓をはじめ同期の遺跡に散見されるものであり、本例もその一つである。

4) 高環形土器 (第14図)

土師器の高環の破片はかなり多数出土した。脚は全般にあまり高くないものである。環部に稜の明確なものは(1)のみで、これは破面でみると製作時の接合部分でもある。(2~4)はその稜が退化した環状のものである。(5)は厚手で直線的な環形をなし、内外面にそれぞれ放射状にハケ目がある。

脚部についてみると、上端をやや尖り気味に絞って環部を載せて接合するものが多く、脚筒内へ脇状に突出したままのもの(2・7)と、さらに脚筒内部から指頭やヘラで回転ナデとしたもの(1・3・5・7)とがある。脚は下方で強く屈折して開き、内面は削り放しで端部のみナデている。



第14図 高坏形土器

(15) は紋りによる縦襞が著しい。また脚部の下寄りに直径7~8mmの円孔の透しのあるものもあり、3方のもの(13・14・16)と、2方のもの(15)がある。また(6)には筒部にハケ目で2段に縦縞文を、そして脚端へ向って放射状に施文を行なっている。

以上の(1~15)は大まかに小谷式併行以後のものとみられるが、(16・17)はやや低脚で

強く開くなどからさらに後出するものであろう。

(18・19)は高环のミニチュア品である。(18)は人念な造りで脚には2方に小円の透しを有する格別の精製品であるが、(19)は手捏ね状の厚手造りである。形態はやや異なる点もあるが、やはり同時期のものであろう。

(20・21)は簡略な脚部を付けた低脚环で、上記よりさらに時代が下る土師器である。

5) 注口・把手・小型丸底壺等 (第15図)

(1)は壺形土器のやや立ち上る單口縁部分で、わずかにハケ目が斜行し、頸部に櫛描線文をめぐらせる。内面頸部以下は削り放しである。須恵器出現以降の土師器であろう。

(2)は小型壺の口縁部と思われるもの。口唇上面に浅い凹線を1条めぐらせる。大まかに弥生後期であろうか。

(3)は壺形土器の下端部分である。下腹を絞って下端とし、下反り気味のしっかりしたタガ状のかかりを貼り付けたもの。内面は削り放しで下端部分をわずかにナデている。焼成良く堅牢な大型品である。須恵器出現前後のころであろうか。

(4)は深鉢形の粗製品で、口縁部には指頭押圧痕が著しく、口唇も起伏する。内面は上部5cmほどが横にカキ目調製で、それ以下脚部は斜めに削り放したもの。外面には不製なハケ目が認められる。底部の形状は不明。外側全体に煤の付着が甚だしく、煮焚用である。これも古式土師器の一連であろうか。

(5)は極く小形の手捏ね土器である。祭祀用で古式土師器に伴なうものであろう。

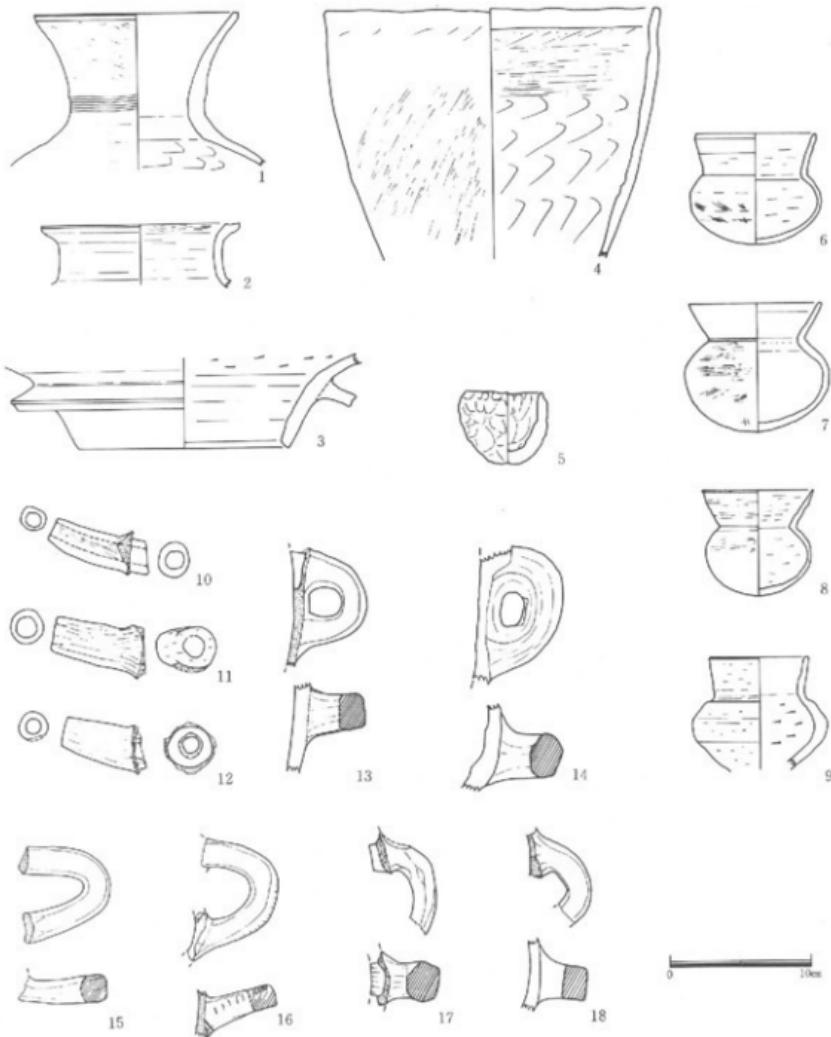
(6~9)は小型丸底壺で頸ー口部は(7)がヘラの押し引きによる暗文状であるほかは、いずれも横ナデであり、胴部は(9)が指頭削りのほかはハケ目調製痕が認められる。(9)のみがやや粗製である。これらは高环と同時期とみられる。

(10~12)は長さ6cm前後の注口で、孔径は1.5~2cm、いずれもわずかに上寄気味である。複合U縁の壺ー壺形土器に付くもので、鍵尾II式に相当するものであろう。

(13・14)は横位置に付く把手で楕のものとみられる。胎土には粗砂粒を多く含み、やや大型の土器を思わせる。なお器の内壁面は荒く削り放しのままであることが判る。

(15・16)は横位置に付くU字形の把手でやや上向きに付くものである。これは複合口縁の注口土器に付く把手とみられ、特に(16)には貝殻刺突文がほぼ全面に施されており、ともに鍵尾II式のものであろう。

(17・18)は横位置に付く把手で断面形はほぼ方形をなすもの。壺形土器の下部に付く把手であろう。これらは小谷式併行かまたはそれ以前かと思われる。



第15図 注口把手、小形丸底堆等

6) 豐・壺形土器の底部 (第16図)

(1~4) は下腹部が尖り気味の器形の底部で、凹部～明瞭な平底である。(2~4) はいずれも縦にヘラ磨きした九重式又はそれ以前の弥生式土器である。(1) は底縁を横にナデしているが、やはり同期のものであろう。

(5~8) は下腹が膨らむ器形のわずかな平底部分で、内面は削り放し、外面は横ナデである。底面は小さいが、明瞭な平底である。(7) は底部に二次穿孔されており、祭祀用に転用されたもの。これらは的場式に比定される。

(9) はほとんど丸底化したものでわずかに平底気味であり鍵尾Ⅱ式又はそれに次ぐ時期のものである。

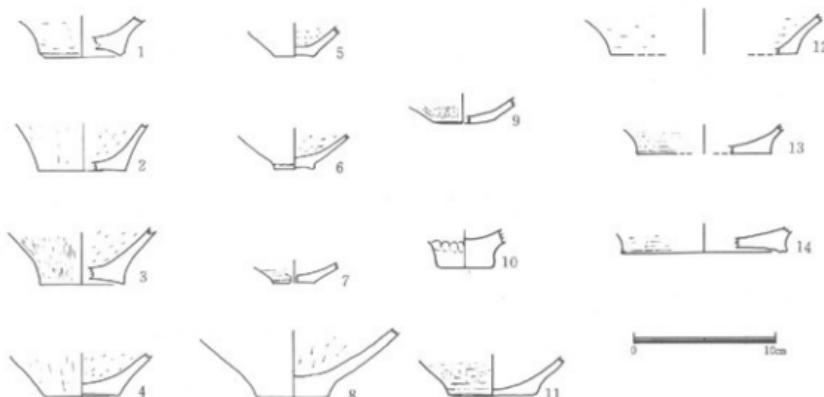
(10) は深鉢形土器の底部であろうか。指頭押圧痕の顕著な細い底部である。内面もナデ仕上げである。時期不明。

(11~14) は大型品のしっかりした平底部分である。(11) にはハケ目が(12~14) は丁寧に横ナデしてあり、内面はいずれも削りのちナデを加えている。これらも鍵尾式又はそれ以前であろう。

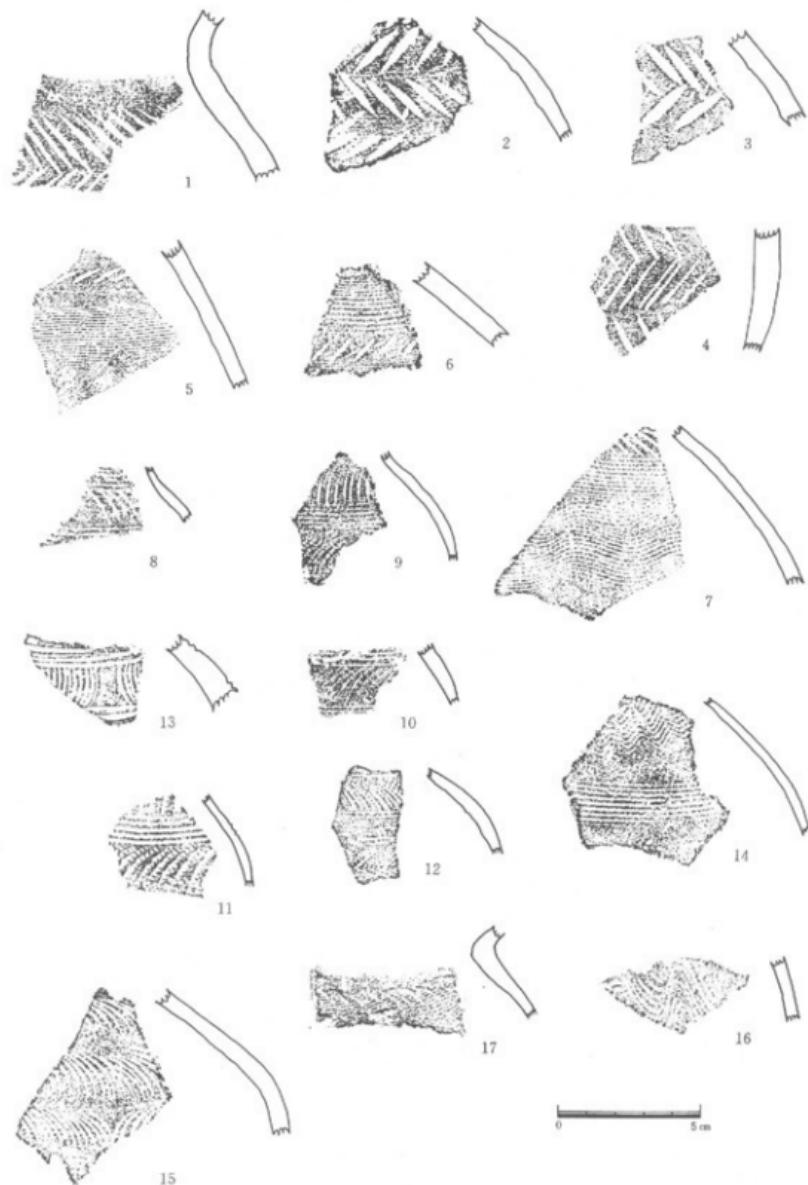
7) 施文破片 (第17図)

豊形土器の頸部直下から肩部に施文された破片についてみると次のようである。

(1~4) は木片工具による綾杉文で、木目痕の鮮やかな刺突施文である。(1) にみられるように頸部直下から施文している。



第16図 底部



第17図 施文破片

(5~7) は上記同様の工具による櫛描多条線分と刺突文を交互に施し、(7) は多条線を波形とした施文帯も設けている。

(13) は上下を 3 条の線文とし、その間に爪形状文をところどころで逆向きに並べているもので、刻線内に朱色顔料がみられることからすると、壺形土器ではなくタマネギ形の特殊壺であるのかもしれない。これと同趣の施文には (8~12) があるが、これは貝殻腹縁を用いて施文している。(14) は平行線を用いないで爪形文のみを 3 列以上施したもの。

(17) は櫛目状工具の押し引き施文で、頸部直下にあるもの。(16) は櫛描波文である。

以上17列の器壁内面はいずれも削り放しであり、胎土は砂粒を含み、焼成も概ね良く、薄手で、大略的場式~鍵尾Ⅱ式併行期のものであろう。

8) 須恵器 (第18図)

本遺跡において須恵器の出土は極く少なく、図示し得る破片はこの 4 点のみである。

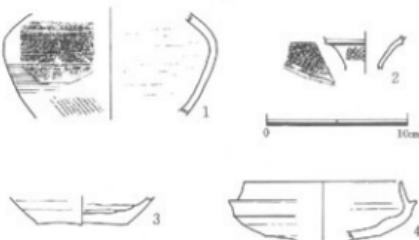
(1) はあまり大きくなない肩の張る壺形土器の胴片である。胴上部の最大径部分に櫛描波文をめぐらせる。その上方は回転ナデ、下方はカキ目調整である。そして胴下部には叩き目が残る。器壁は均齊に薄く、内面は全面回転ナデである。青灰色で焼成も良く肩部には自然釉が付く。(2) は瓶の頸部であろう。薄手で、入念に櫛描波文を施す。小形品で頸部の高さはあまり高くないようだ。焼成良く淡青灰色である。山陰Ⅱ期か、Ⅲ期とすれば古いものであろう。

(4) は环身で、立ち上りはやや内傾するが直線的に高く、底部との堀には明瞭な稜が付く。底面は回転削りである。やはりⅡ期とみられる。

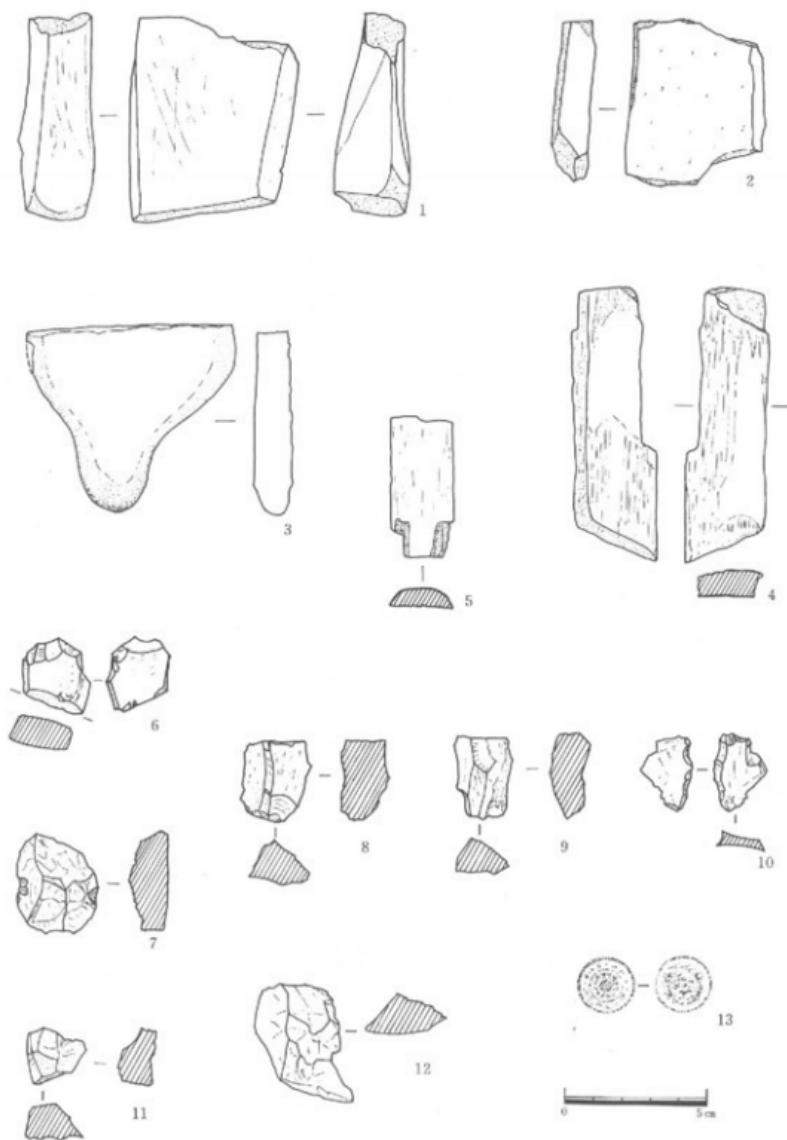
(3) は内外面とも削りのままで、回転糸切りの底部である。小型の壺であろうか。淡灰色で焼ひずみもある。歴史時代に入るものであろう。

9) 砧石・攻玉未成品等 (第19図)

(1・2) は平砥である。(1) は白色で偏水系の中砥に相当するもの。角柱状の 4 面と稜線に沿った狭い 1 面の都合 5 面の砥面がみられる。(2) はやや粗粒質の砂岩系荒砥で、上面と側面の 2 面を使用したもの。いずれも舟底状の砥減り状況であり、玉砥ではなく金属刃物用であったのか



第18図 須恵器



第19図 磚石、玉未成品

もしれない。

(3) は多孔質灰黄色の石材で、火山浮石の一種とみられるものである。半折しているので全形は判らないが、小把手状部分のある平板状のもので、上面のみを使用した砥石である。底面は極めて平坦で、用途は玉作か金属刃物用かは不明。

(4・5) は珪化木を用いた攻玉用砥石である。(4) は板状剥片を用いて1面を平砥に、他の1面は緩やかな丸味のある砥面である。砥減りの少ない完形品であり、手に持てて使用したものである。(5) は甲丸状のもので折れている。甲丸面が砥面で内磨き用である。

なお、このほかにも珪化木の細片が採取されたが、砥面は認められなかった。

(6) は碧玉製勾玉の製作途中で折損したもの。上下両面と背部は粗く研磨しており、腹部は剥ぎのままである。孔は穿っていない。(7~9) はすべて碧玉で、側面打製の未成品である。(10) は剥片であろうか、黒曜石である。同様に(11) は赤メノウ、(12) はメノウ質の岩石片である。

(13) は田区石垣の部分で採取した明治33年銘の五銭銅貨である。水田区画整備の時期を示す資料といえよう。

4. 小結

角田遺跡は加多神社の前方の丘麓部に所在し、大東高校グラウンド遺跡や輪之内遺跡の西約100~50mの位置にあたり、南約60mを西に流れる赤川の河岸段丘上である。

現況は数次にわたって区画整理が行われた水田であるが、原地形は織部谷からの谷川が、赤川本流に合流するあたりの河岸に相当すると思われ、砂洲縁辺部の様相であった。

水田造成による盛土を除くと遺物を包含する砂混り黒色土層が、薄い流砂層を挟みながら広く全面を被い、南へ傾斜している。この土層は流砂の厚い堆積、又は泥質黒色土の上にあるもので、流れの縁辺部に生ずる澱みに生成される地層と判断された。

この遺物包含層も、その上面はかっての水田造成に際して削られており、土層の厚さは20~60cmと個所によって大きく異なっていた。

丘麓寄りの高位部分には一部分に崩落した山土層の先端部があり、そこに石で根詰めした柱穴が検出され、また近くに柱下と思われる石が3.8~4.0m間隔で所在したが、建物プランとしては推察の城を出るものではなかった。この柱穴には伴う遺物はなかったが、遺物包含層を一部敷いて石積みされていることから、大まかに中世以降の遺構であろうと考えられる。

またこの近くでは、不定形で浅い皿状の凹みに粗砂とともに古式土師器の比較的まとまった破片が検出されたが、これは水の渦流によるものと思われた。

遺物包含層は単純な層ではなく、その間に不連続の薄い砂層があつて數次に分けて堆積したものであるが、その面は必ずしも明瞭でなく、全出土量を區別についてみると、基盤地形の起伏に沿つて大略3条の集中がみられる。また採取した大形破片の破面は磨耗があまり著しいものではなく、極く近い位置から移動したものと思われる。

遺物の原位置は確認できなかつたが、この出土状況は現位置にかけてあったものがその地盤を洗われたことによつて低部に集約したものとみることができよう。

採取した遺物の総数は24,000点余で1m²当平均43点となる。遺物の大部分は土師器片で、須恵器はわずかに0.4%にすぎない。

器種では菱形土器が最も多く、高環や鼓形器台もかなり多く3.5%を占めている。これらは複合口縁の退化した段階から須恵器の導入されるまでの限られた期間に属するものがほとんどであり、これに伴うとみられる玉作未成品や砥石などの攻玉資料も採取された。

また調査区の北東隅高位置の丘麓張り出し地形のあたりを中心に、縄文時代後期権現山様式の土器片等が若干採取された。これは大東町内での縄文式土器検出の初例である。

出土遺物中の高環・小型丸底壺・鼓形器台や攻玉資料等は注目すべきもので、單なる集落跡に関するものとは異なると言えよう。

古代からの神社である加多神社の社頭に立地し、これら攻玉に関する遺物を出土するこの角田遺跡は玉作工人に関与する集落であったことを示唆するものである。

またこれらの遺物内容や出土状況は、東隣する大東高校グラウンド遺跡のそれに酷似しており、一連の遺跡とみることができる。

B. 又下遺跡

1. 調査の概要

又下遺跡は、大東高校体育館の裏手にあたる織部谷（オンベダニ）入口部の狭隘な水田地である。大東高校グラウンド遺跡からは北約100mの位置である。

高校格技場建設予定地のA～C田区について、昭和61年12月、谷を横断する東西方向にトレンチを設けて試掘調査した。

その結果、A田区の耕作土の下には遺物を濃密に包含する砂混り黒色土層があり、層間には薄く粗砂層が挟まれて東の谷川方向へ傾斜していた。その下には粗砂層が厚く堆積して基盤となっていた。しかし、A田区から1.0m下位の田区では、遺物包含層は削り去られて既になく、Aでの下層土である粗砂層のみが耕作土の下にあり、遺物等は認められなかった。遺構は明確ではなかったが、遺跡はA田区のみであり、発掘面を拡大して約1,600点の遺物を採取した。

遺構は明らかでないが、遺物包含層はさらに東下方へと続くことから、翌昭和62年3月引き続き拡大して発掘を行なった。作業は圃場造成工事による盛土部分は重機にて排土し、



第20図 又下遺跡トレンチ配置図

2 × 2 m 方眼区を設定して行なった。発掘面積は280m²である。

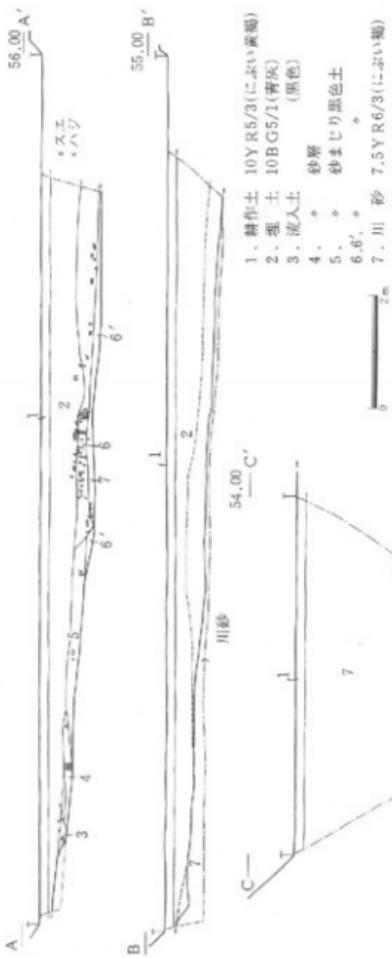
2. 遺構

トレーナー断面によって土層の重なりをみると(第20・21図) 耕作土(1)の下には、区画整備に際し厚く盛土(2)がされており、東端道路敷の近くは風化花崗岩の地山が認められるが、1.5mあたりから急に下降している。これに替わって流入した粗砂土(7)が厚く堆積する。この粗砂土の上に、4.5m付近から西へ下降しながら厚くなる砂を含む黒色土層が薄い砂層を挟みながら堆積していく、これが遺物包含層である。

遺物包含層を取り除いたベースは(第22図)、北西~北寄りに幅2~5mは風化花崗岩の真砂土山で堅く、水田造成によって削られた面である。これに続く部分から西へは緩やかに下降する粗砂堆積面であり、発掘区のはば中央B1区あたりから南東の体育館に近いD7区あたりに向って下降する浅い谷地形の起伏がある。この地形に沿って遺物の出土も特に多く、また流れ込んだとみられる中~小の石礫も散布した。

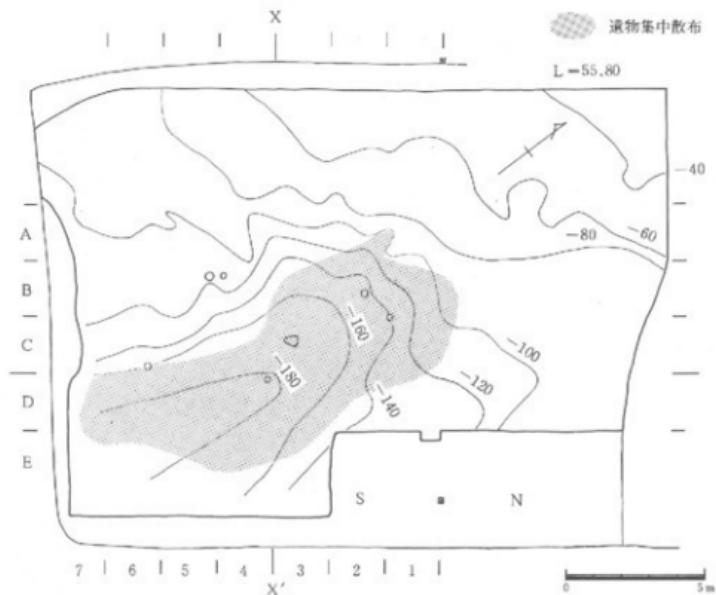
遺構としては、わずかにB5・B4区に砂地に掘り込まれた柱穴状ビットが2穴認められた。近接したこの2穴は底径25cmであるが、底レベルは異なる。そしてビット内には古式土師器の壊片が落ち込んでいた。またD4区とB2区にもやや小さい柱穴ビットかと思われる部分があったが、明確ではなかった。

これらの柱穴と対応する他の柱穴等は既に削り去られたレベルであり、プラン等は不明である。



第21図 土層断面図

このように又下遺跡には、かつて古式土師器の時代に掘立柱の住居があったことは想像されるが、それ以上の事柄については、ほとんど痕跡が残っていなかった。



第22図 遺構図

3. 遺物について

遺物を包含する砂混り黒色土層の断面（第23図）をみると、C～D区あたりが最も深くなるU字状の堆積がみられた。

先ずベースとなる粗砂の上に、東へ緩やかに傾斜する厚さ20cmほどの遺物包含層がA区あたりから始まり、これには複合口縁の壺形土器片が若干含まれている。

この土層の東側を斜めに削って次の粗砂混り黒色土があり、上面に薄く粗砂層とさらに微砂質土層が重なって傾斜層をなし、C区に達している。そして再びこの上に木炭片を含む砂混り黒色土が、川礫や遺物多数とともにC～D区を中心堆積している。このうち最下位の砂混り黒色土の上面は固く締まっているが、その後の堆積層は比較的軟弱で、崩れ易い土層であった。

この層序を模式的に記すと、下から遺物を包含する砂混り黒色土、遺物を包含する薄い粗砂、薄い細～微砂のセットの繰り返しであり、川幅が広くなり流れも急に緩やかとなっ

た地点にみられる砂洲状の灘みに流下した粗大物が沈着する様相を示していると言えよう。

(第24・25図)

従って、この遺跡から出土した夥しい遺物は、極く近い上流～微高地あたりから、少なくとも三次以上にわたって流入堆積したものと判断される。

遺物の出土状況を区別にみると（第26図）、高位のN区では削平を受けてほとんど無く、S区のB1、B2、C2、C3、D3、D4、D5、D6、E4、E5などベースの伏地形をなす部分に集中していた。

二次にわたり採取した遺物は次のようにある。

総数 12,241点

内 土師器片 10,813点

（古式土師器片222点を含む）

須恵器片 1,386点 (11.3%)

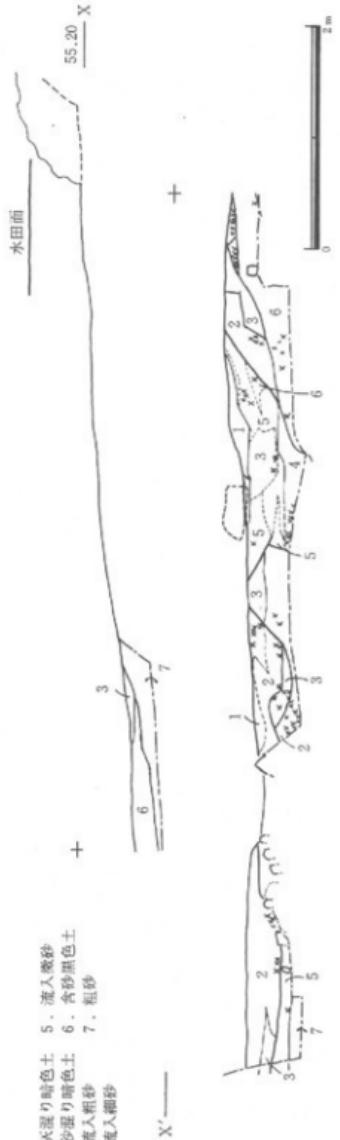
攻玉関係 28点

（玉作未成品、砥石等）

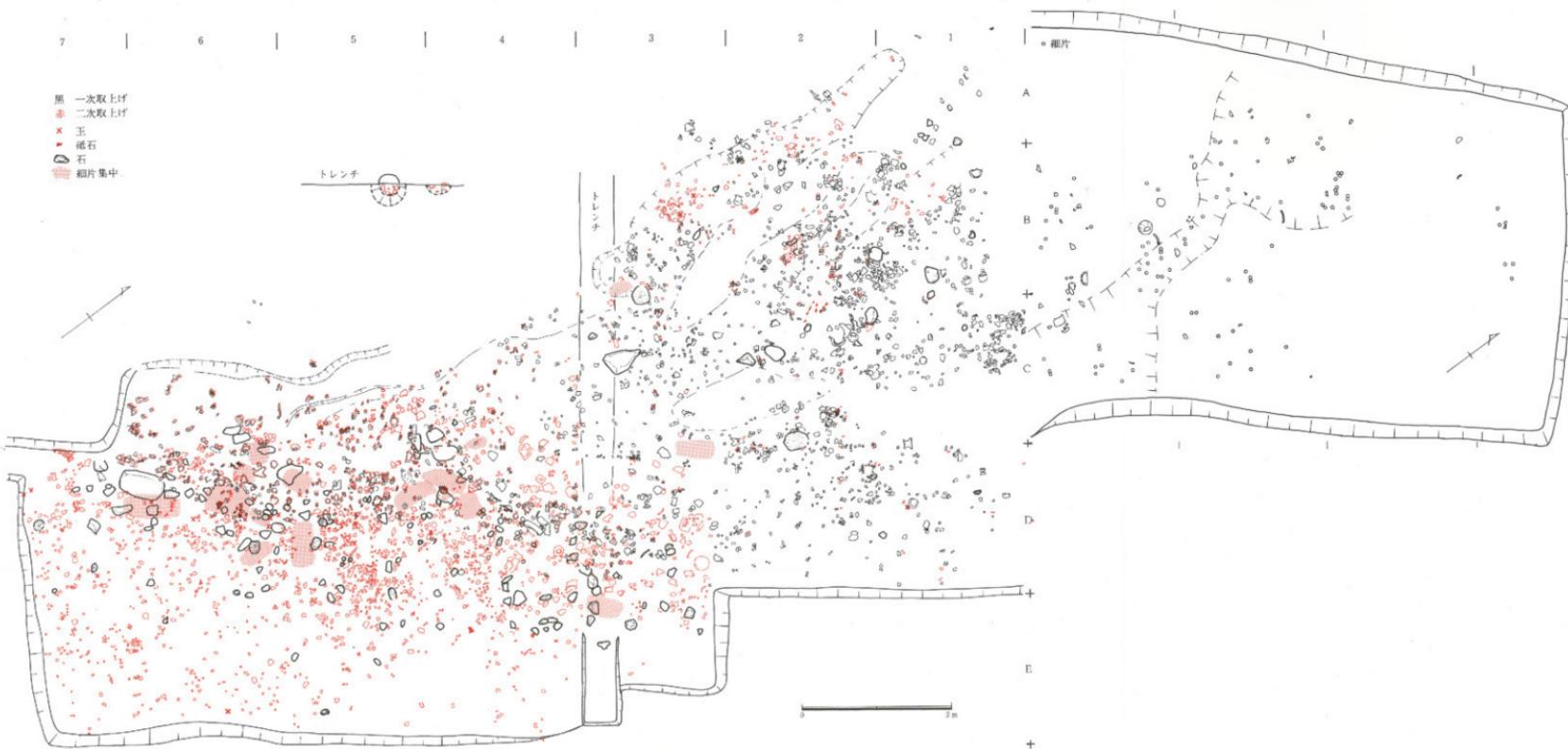
その他の 14点

（紡錘車、石製模造品）
（スラグ、耳環等）

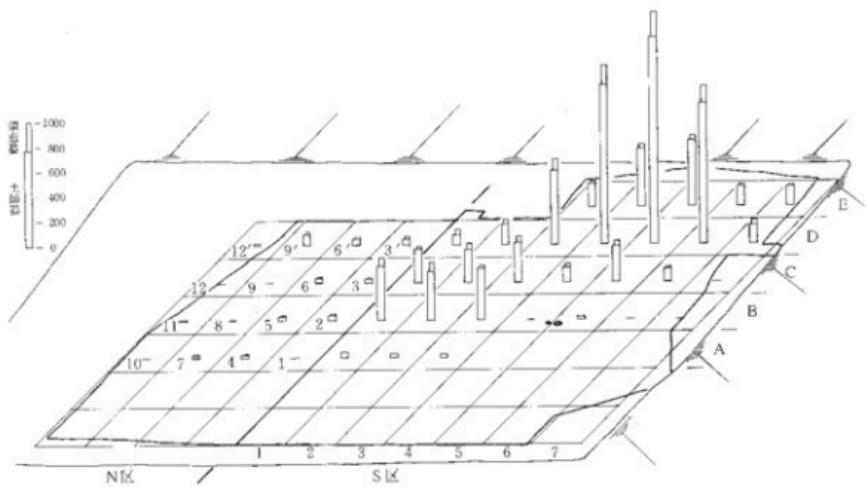
大部分は器形の判別し難い土師器の細片であるが、壺形土器はそのほとんどが、く字状に短く開く口縁で、煤の付着するものも多い。須恵器は新しい様式の高环形のものが多い。攻玉関係では碧玉・メノウ等の未成品がみられ、一部の砥石は玉磨き用である。



第23図 遺物包含層断面図



第24・25図 又下遺跡 S区・N区遺物出土状況



第26図 区別出土遺物数

区分	2	2'	3	3'	4	5	6	6'	7	8	9	9'	10	11	12	12'
	総数	0	58	34	66	22	36	46	70	16	3	0	110	0	6	0
ハジ		40	29	54	18	29	39	53	14	2		92		5		15
スエ		18	5	15	4	7	7	17	2	1		18		1		
玉・他		0	0	0	0	0	0	0	0	0		0		0		

区分	A			B			C			D			E				
	総数	ハジ	スエ	正・危	総数	ハジ	スエ	正・危	総数	ハジ	スエ	正・危	総数	ハジ	スエ	正・危	
1	51	50	1	0	610	526	84	0	285	273	12	0	128	86	40	2	—
2	34	34	0	0	459	390	68	1	305	262	39	4	200	155	34	1	—
3	23	23	0	0	429	417	10	2	364	321	43	0	691	600	90	1	213
4	—	—	—	—	—	—	—	143	114	29	0	1,444	1,276	166	2	507	
5	—	—	—	—	34	34	—	—	332	292	39	1	1,867	1,665	198	4	580
6	—	—	—	—	—	—	—	—	116	105	11	0	1,273	1,132	132	9	181
7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	190	155	33	2	169

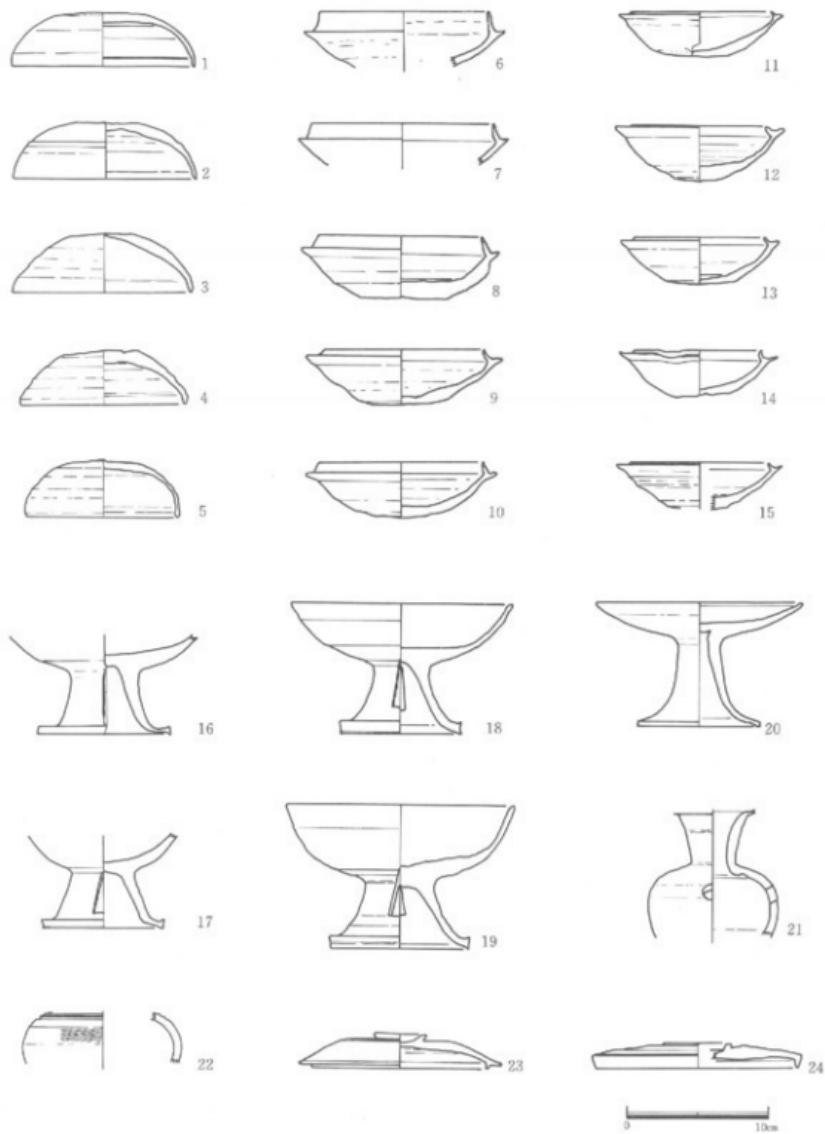
(他に表記未記入中) ハジ 987 スエ 134 玉・他 7)

出土遺物合計 ハジ 10,813 スエ 1,386 玉・他 42 総数 12,241

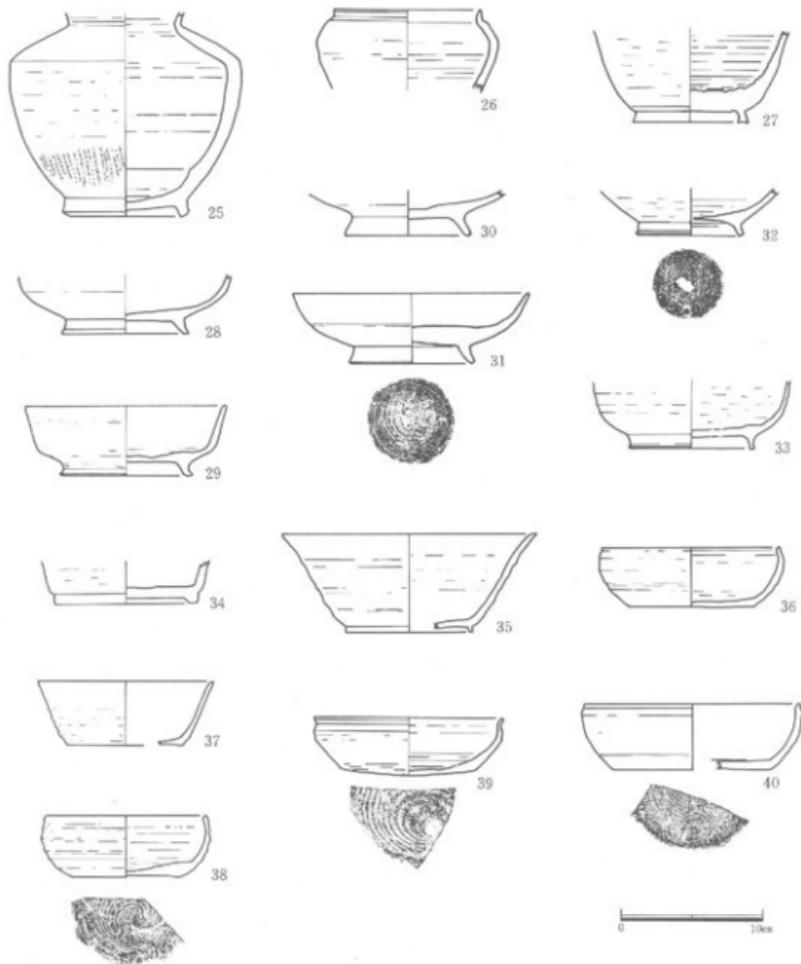
又下遺跡出土遺物集計表

1) 須恵器 (第27・28図)

(1~5) は壺蓋。(1・2) は明るい青灰色で焼成良く整形で口径13.0cm、ともに口縁内側に段をつくる。天井部1/3がヘラ削り。(2) は2条の沈線で棱を表わし、天井部にX字のヘラ記号がある。いずれもやや小形ながら山陰Ⅲ期である。(3~5) は口径が11~12cmの小形で



第27図 須恵器(1)



第28図 須恵器(2)

天井部と体部の区別は明らかでなく、天井部はヘラ削り、口唇は厚目で内寄する。焼成は不良。身と蓋の逆転する直前の時期(IV期)のものである。

(6・15)は壊身である。(6・7)は立ち上りがやや内傾気味ながら高く、器厚も均齊であり、直径は14~15cmで、焼成良好。山陰Ⅲ期に相当する。

(8)は器壁に大きな焼き膨れがあり、器底は特に厚い。底面には重ね焼きの痕跡がみら

れる。立ち上りは内傾。直徑14cm、淡青灰色で焼成は良好。(9・10) は直徑14cmロクロ整形痕著しく厚さも不齊。立ち上りは低く内傾強い。底面はヘラ削り、焼成良好。この3点はⅣ期に属する。

(11~15) は直徑11~12cmの小形であり、底面はナデ(11・13)と削りのまま(12・14・15)とがある。立ち上りは極く短く強く内傾する。身蓋逆転の直前の時期にあたる。

(16~20) は高壺である。口徑15~16cmで、いずれも脚は短く脚端で強く開く。脚端が下に尖るもの(16)と、上方へ突出させるもの(17~17)がみられる。(16~19)は2方向に透し孔があり、ヘラで縦に切目を入れただけのもの(16)と三角形(16~19)とがある。特に(18~19)は酷似し、同一製作によるものとみられる。壺部は瓶形で底が広い。(20)には透し孔はなく、脚端は下に伏せる形状で环も浅い。焼成弱く、前者より後出するものとみられる。

(21) は小形の甕で、胴上端近く2条の沈線がかすかに認められる。口縁は欠けていて不明。焼成良好。(22) 同様の甕とみられる破片である。2条の沈線の下に5条の柳描波文が施され、内外面ともに入念にナデしている。焼成は堅いが、にぶい褐色を呈する。

(23~24) はつまみの付く蓋である。(23) は平坦は天井に逆ハ字状に聞く輪つまみを付けたもので、かえりが付く。内外面ともナデ、直徑14.5cm。(24) はほとんど平らな器姿で、口縁端が垂直に折れ曲るもの。輪つまみは削り出しである。内外面ともロクロ痕が著しく直徑14.8cm。ともに灰白色氣味に焼成した8世紀代のもので、前者がやや古く、後者が後出する。柳浦編年の6・7期に相当する。

(25~27) は高台の付く小形壺である。(25) は重心の高い器形で胴最大径16.5cm、口縁部を欠くがく字状に聞くものと思われる。器高は推定16cm位。胴下部には叩目が残るが、外面はナデ、内面はロクロ削りのままである。高台は直立気味で厚く、裏はナデしている。青灰色で焼成は良い。(27) もほとんど同様の胴以下の部分。高台はやや開き、糸切痕が明瞭である。灰白色氣味で焼成は弱い。(26) は胴部以上の部分で、やや薄手造りである。口縁は短く直立する無頬のもので、蓋が付くものとみられる。内外面ともロクロ整形痕が明瞭である。

(28~35) は高台の付く环である。(28~32) の高台は強く聞いて踏んばる形で、底面は糸切りのち回転ナデであるが、(32)のみ糸切りのままである。また(31)の底面にはX字のヘラマークが刻まれている。またいずれも环底は一段と凹ませて薄くなっている。(30)には环内面に放射状のハケ目が薄く施されている。いずれも淡青灰色で焼成は良い。これらは蓋茶碗様式の初期にあたるものである。

(33~35) は高台が外縁寄りに付く(34)か、或は短く直立気味(33・35)に付くもの。特

に(35)は環体部は直線的に開き、口縁は外反気味に取まるもので、裏面は糸切りのままである。そして土はち密であるが、焼成は弱く、器外面は燃焼の黒色である。(35)は(33・34)より後出するものであろう。

(36~40)は高台の付かない平底の环である。直径は13~15cm、体部が丸く口縁は内弯するもの(36・38・40)、直線的に開くもの(37)、口縁に括れ部をつくるもの(39)などがある。いずれも底面は回転糸切りのままである。(38・40)は青灰色で焼成良く堅いが、(36・37・39)は外面が燃焼の黒色で、内面は灰白或は暗赤褐色を呈し、焼成は弱い。大まかに須恵器の終末期に近いものである。

このように須恵器では(1・2・6・7)が古墳時代後期であるほかは、すべて歴史時代に属するもので、ほとんどは8世紀代を中心とする限られた期間のものといえよう。

2) 土師器(第29図)

(1~4)は古式土師器である。(1)は壺形土器で短く直立する口縁は直径11.3cm、内面胴部以下は削り放し、口縁下端の突出帶は頸部からの繰り上げである。レンガ色で焼成良い。

(2・3)は複合口縁の甕形土器である。口縁にはラフな櫛搔沈線をめぐらせ、下端は下に尖る。肩部には二枚貝の押圧によるノ字文をめぐらせ、以下は横ハケ目調整である。胴部以下の内面は削り放しである。(3)は薄く外反する口縁で、下端は横に突出する。

(4)は直線的に窄まる壺体底部で、下面是破損が著しいが、しっかりした平底であろう。外面にはわずかにハケ目がみられ、内面は削り放しである。以上は的場式併行期のもの。

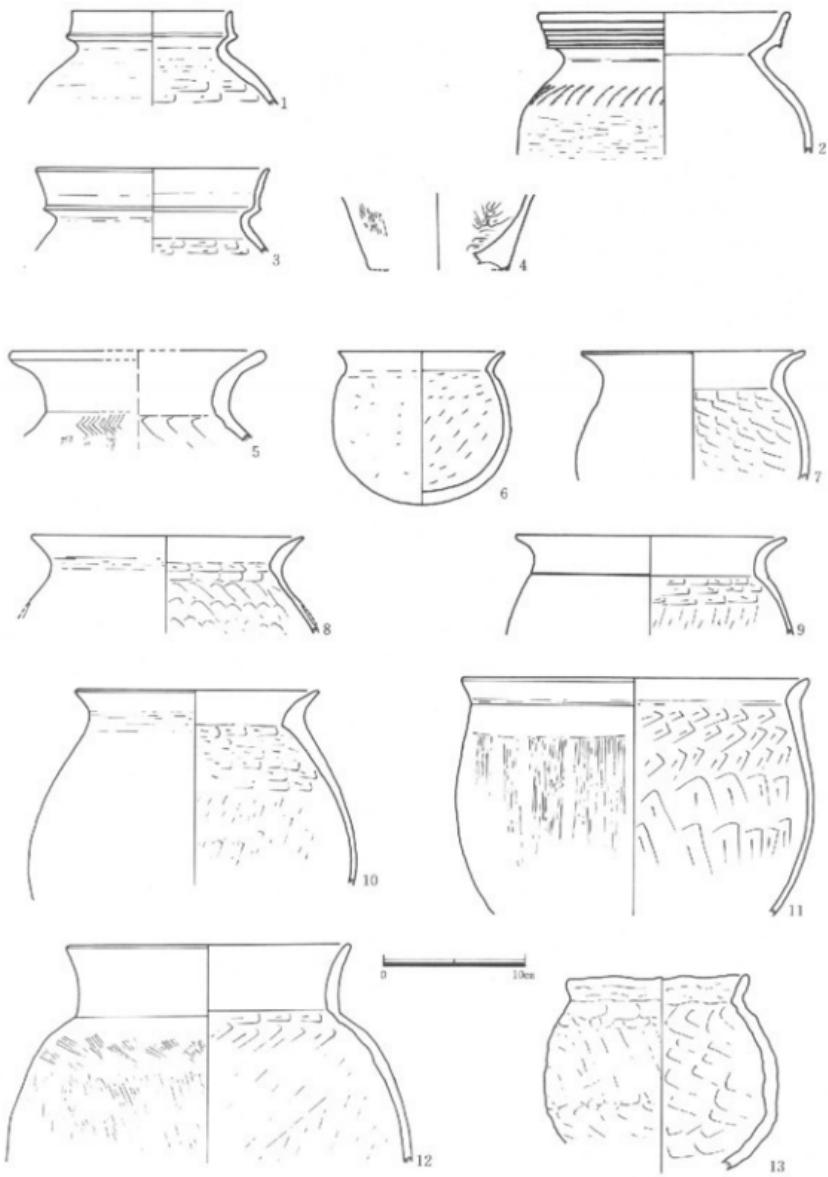
(5)はやや頸部の縮るく字状口縁で、口径30cm以上に及ぶ大型の甕である。頸部以下縱ハケ目が残り、内面は削り放しである。胎土には砂粒を含む。

(6~12)は短く強くく字状に屈曲する口縁の中~小形の甕形土器である。いずれも胴径に近いほどの広口で、頸部以下内面削り放し、外面はナデ仕上げ(6~10)と縱ハケ目(11・12)がある。胴はやや下彫れの形であり、すべて丸底であろう。また胴に煤の付着(7・9・12)が著しく、煮焚用のものと知れる。(11)は特に口縁が短く、土鍋形ともいえよう。(13)は手捏ね造りで胴径16.5cm。内面は削りが加えられており、外面には煤の付着が著しい。

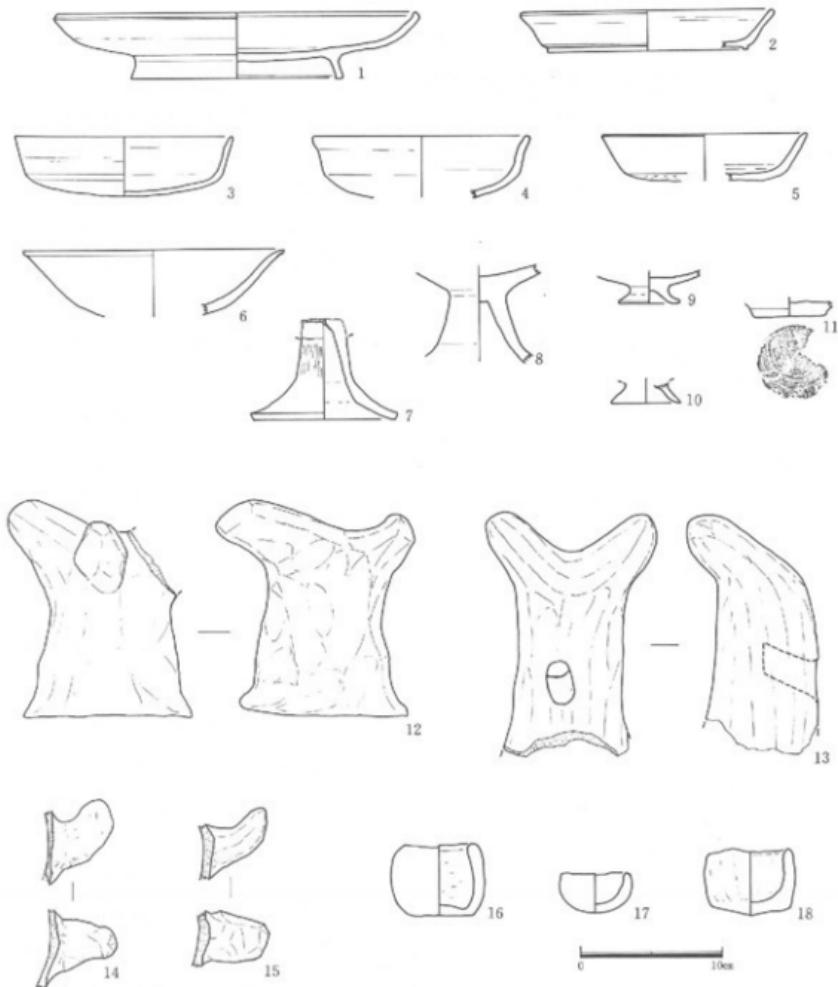
(1~4)のはかは大まかに古墳時代後期以降のものとみられる。

3) その他の土器(第30図)

(1・2)は土師器の盤である。(1)は直径26cm、高台は高く踏んばる。(2)は外縁寄りに低い高台が付く直径18cmの小型品で、(1・2)ともに内外面を赤く塗彩している。胎土はち密であるが、焼成は弱くもろい。



第29図 土師器



第30図 その他の土器

(3~5) は土師の壺である。口唇をわずかに外方へナデ、底部はヘラ削りである。(5) は内外面とも赤色塗彩である。

(6~8) は赤く塗彩した土師の高壺である。壺部 (6) はおおらかに外反する形にナデ仕上げ。脚部 (7・8) には透し孔ではなく、ハケ目の残るもの (7) もある。脚筒内面は回転ナデである。いずれも胎土はち密で、(6・7) は焼成弱く、粉質状にもろい。

(9・10) は低脚環の脚部片である。脚端を丸く収めるもの(9)と、尖らすもの(10)とである。ともに焼成良く、黄橙～黄褐色で堅い。

(11) は回転糸切りの底部片である。小環の底部であろうか。淡黃灰色で焼成の弱いものである。

(12・13) は土製支脚で、(12) は後方に突き出す小角のあるもので、やや小形品。(13) は下部後方に斜めの穴を穿つもので、これは支え棒を用いるものであろうか。いずれも指で粗く整形したものであり、(13) の穴は棒状工具によるものであろう。明赤橙色で砂粒が多い胎土である。

(14・15) は角状の把手で、粗くヘラ削り整形したものである。器壁が薄いことからすると、土鍋状の器のものであろうか。

(16・18) は手捏ねミニチュア土器である。底の平らなもの(16・18) と丸いもの(17) がある。

以上のように高環・盤・環などの多くは大まかに 8 世紀代のものとみられ、また赤く塗彩されたもの多いこと、ミニチュア土器もあり、一般の生活用具とは言い難く、祭祀に関与する用具とみられるものである。

4) その他の遺物(第31図)

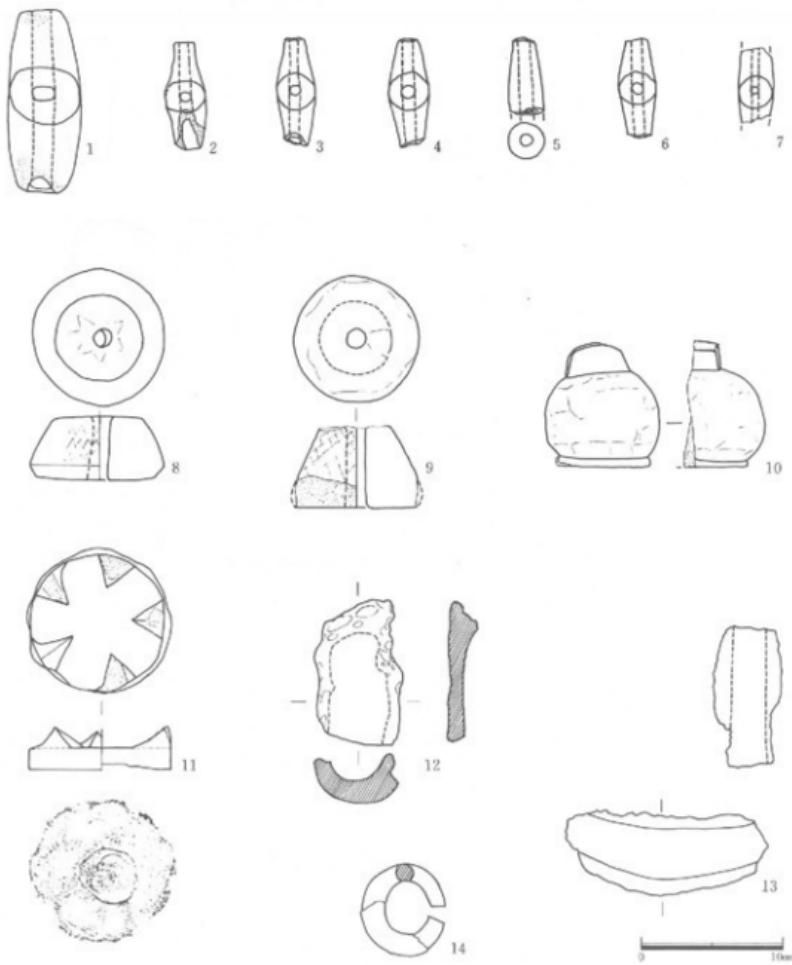
(1～7) は土錘である。(1) は長さ 6.5cm でやや大きいが、あと(2～7) は 3.5～3.8cm と小形である。孔径 2～4mm で整形ではない。(1) の孔径は 7×5mm の長円形である。

(8・9) は紡錘車である。滑石製、裁頭円錐台形で(8) は上面と側面に浅く鋸歯文が線刻してある。下面は磨耗のため不明。(9) は上下面とも磨耗して不明であるが、側面には斜格子文が浅く線刻してある。いずれも直径は 4.7cm、厚さは 2.9cm(9) と 2.3cm(8) である。

(10) は使途不明の石製品。ち密な凝灰岩質で直径 4.2cm の球体の下面を平らな底面とし、上端には鉤を思わせる長方形凹頭の突出部が付く。面整形は多面のカット状に研磨したもの。これは敢えて言うならば、鉛状の石製模造品とでも言うべきか。

(11) は赤褐色の焼成の良い陶片で、直径 5cm の円板に三角形に尖る歯牙状の突起を 5 個付けたもの。土器焼成の窯道具で、窯内で器体を支える台である。平安時代以降の陶器用であろうか。

(12・13) はスラグ(鉄滓)である。(12) は軟質で中～小の発泡孔が多く、無光沢で青黒色を呈している。直径約 2cm の円筒状物体に接して冷固した形状であり、吹子の羽口部に付着した鉄滓に類似のものがある。(13) はやや楕円形をなす塊で、厚さ 2.5cm の多孔質で、木炭の小片を含有する黒褐色のスラグである。底面には高温還元で青変した粗砂が固着し、上面には



第31図 その他の遺物

黄褐色に鉛化した焼土がこびり付いている。(12)は鉄製・精錬に伴うものではないようだが、銅の加工であるのか、ガラス吹きに関するものであるのか等は判らない。(13)は鉄加工に際して生ずるものに近いようだ。

(14)は銅を地金とする銀環で、直径3.4cmを計る。この遺跡の出土品では異質なものとみるべきか。



第32図 砥石・玉未成品

5) 砥石・玉未成品(第32図)

(1~8) は砥石である。

(1) は明緑灰色の細粒質花崗岩で、自然面の平らな1面を使用したもの。砥減りは少ない。

(2) は明青灰色の半花崗岩で、輝石、黒雲母等は細晶のものである。2つの平面と2つの棱とが砥面であり、平砥面はそれぞれわずかに凹み、かなり使用されたものとみられる。

(3~5) は凝灰岩質である。(3) はやや粗で中砥目に相当し、やや軟質である。4面使用。

(4) は微粒質でやや硬質。上・横の2面使用。(5) は纏白色微粒質で、上面のみ使用。但し側面には条状の砥痕がみられる。これらはすべて舟底状の砥減りで、砥石中央が細くなつて折れている。鉄製刃物に使用した砥石の場合に似るものである。

(6) はやや目の粗い灰白色の半花崗岩質で3面の砥面がある。いずれの砥面も平坦でなく、凹みの様相は上記に類似している。

(7) は粒子の細かい砂岩で灰黄色を呈している。3面使用しているが、1面は山形、他の2面は正しい平面であり、単なる刃物用とは異なる。

(8) は板状の石英片岩を用いている。上面を平砥面とし、両側面が丸砥面である。これは(1~7) のように据置いて研磨物を動かしながら行うのとは異なり、砥石のほうを動かして使用するもので、明らかに攻玉用であり丸砥面は内磨き使用である。

(9~11) は水晶である。(9) は完成近い小形勾玉で、やや不透明さが残る。長さ2.5cm、厚さ6mmである。(10・11) は荒割り段階の素材である。

(12) は自然面を一部に残すメノウで長さ3.0cm、(13) は縞メノウで長さ3.0cm、いずれも勾玉の未成品で荒割り段階のもの。(14) は碧玉で同様に勾玉用。

(15) は碧玉を用いた管玉の未成品で側面打裂したもの。長さ3.5cm幅1.6cmである。

(17) は暗赤色半品質の剥片。(18) は黒曜石の小塊で玉作素材であろうか。

(19) は黒曜石製の幅3.0cmの小形石匙で、つまみ部が欠けている。

(20) は暗青灰色安山岩質の石塊で、大きく打ち欠いたもの。石器製作の原石片であろう。

(9~20) のうち (16・19・20) の石器類を除いて玉作未成品等であり、このほかにも若干の碧玉やメノウの小剥片も検出した。

4. 小結

又下遺跡は大東高校裏の織部谷入口部にあり、かつては谷川の流れに洗われた緩斜面の地であったとみられる。

堆積した土層は、古式土師器を若干含む下層の砂混り黒色土が、厚い流入砂質土の上に斜行し、谷の流れはさらにこれを削って次の遺物包含土層を堆積させている。

ここから採取した遺物は、多くの土師器や須恵器などとともに、砥石や玉作未成品など特別な遺物も石礫とともに包含していた。そして土層の重なりなどから流れの澁みに数度崩土の流入があり、それが遺物を包含して漸次堆積したもので、特に大きい石の近くの渦流部とみられる部分に遺物が集中していた。

またこれによって往時の流れは現在より西に偏っており、発掘地点を通過して高校のグラウンド中央あたりに向っていたものと推察された。このことは明治22年調整の字切地図にも表現されており、この流れが字織部と字古城との境界ともなっていた。

流入堆積した夥しい遺物は、その破片があまり磨耗していないこと、大破片も多いことなどからして、遠距離を流下したものではなく、極く近い上流～上位置からのものと思われるが、その位置は特定できなかった。

出土遺物は甕等の生活用器が多いのは当然としても、特に赤く塗彩した土師の高环等や、須恵器の高环或は玉作未成品や砥石など注目すべき品が多くみられ、この遺跡の性格が單なる集落跡に関わるものではなく、玉作に大きく関与するものであることを示している。

出土遺物の時代をみると、剝片石器と石匙が縄文時代のものであり、西寄り高位に残存した下層土の上部から出土した若干の複合口縁土器は弥生終末期～古墳時代初期であるが、総数約12,000点余にのぼる遺物のほとんどは7世紀後半から8世紀末までの限定された期間に属するものであり、玉作資料もこれに相当するものであろう。

これらのはかに、さらに検討を要するものとして次のことを挙げておく。

スラグ2点が出土したが、特にその1つは吹子の羽口に付着したものとみることができるもので、鉄生産には関与しないものと判断されることから、或は銅又はガラス生産・加工に關係するのかもしれない。しかしこれを立証する遺物は未だ発見されていないので、想像の域を出ないものである。

また窯道具の出土は、付近により時代の降る焼物窯が所在したためなのかも、この1点のみでは確証に欠ける。

古墳時代の遺物として蓋環4点と銀環1点が採取されたが、これはかつて付近に所在し消滅した古墳又は横穴に由来するのか、特に銀環はこの遺跡付近で製作されたものの一つであるのか判断しかねるものである。

さらに、地名について付言すると次のような一つの解釈も可能であろう。

当遺跡の小字地名は「又下（マタゲ）」であり、北東隣接（主として山林）の部分は小字地名が「要害（ユウゲ）」である。「又下」は「ユウゲ」を音を借りて「又下（ユウゲ）」と表記したもので、今日これを読み替えて「又下（ユウゲ）」となったものではなかろうか。今後諸資料についての検討が必要であろう。

IV まとめ

大東高校校地拡張に伴い調査したこの角田遺跡及び又下遺跡は、赤川中流部の北岸にあり、古代から玉作の拠点であった玉湯町玉造から山一つ越した丘麓部の谷口部にあたる。北から大東盆地に向って聞く谷口部であるこの字織部地区は、同様の地形で隣接する田中地区、新庄地区とともに、特に遺跡の密度が高く集落跡とみられる遺物散布地が点在し、丘陵上には後期古墳がいくつか知られている。

調査した二遺跡は、現況は水田であるが、ともに原地形は数次に及ぶ水堀の氾濫原であり、遺物はその澗み又は河川敷の砂洲状の地形に集中堆積したものであった。即ち川砂層をベースに砂混り暗色～黒色土が遺物を包含して堆積したものであり、特に又下遺跡では石礫の間に細片となった遺物が多く集積していた。

このような流れの跡は、織部谷から又下遺跡を経て、南西に約100m下って大東高校グラウンド遺跡の砂層に連なり、さらに西の輪の内遺跡A区をかすめて、西隣・角田遺跡の南半分にあたる赤川沿いの部位に達して本流に合流していたものと判断された。

この状況は明治年間作製に関わる字切地図上にも明瞭に図示されており、ほぼ織部地区と古城地区との界線でもあった。

遺構として顕著なものはなかったが、角田遺跡では中央部北寄りの微高地に一部遺物包含層の上から掘り込んで、石で根固めした石數の柱穴が1基検出された。しかし、これに連なる他の柱穴は見当らず、わずかに転在石2個が方形の配置に在った。これがはたしてプランに伴うものか否かは判断しかねるものであった。この時期は掘り方の地層からして、古代ではなく中世以降と思料された。この他の地面はすべて水による堆積砂の自然地形であると判断した。

又下遺跡についてもほぼ同様で、西山寄り部分に素掘りの柱穴2があり、粗砂とともに古式土師器の大破片が流入していた。建物プランは流失のためか検出できなかった。そしてこの基盤面も水流で洗い削られて、以後の遺物包含層が堆積し、遺物のほとんどはこの後者によるものであった。

出土した遺物についてみると、角田遺跡では須恵器の出現する直前の複合口縁から單口縁へと様式の移行する時期にあたり土師器が主であり、ミニチュア高環・小形丸底壺などや玉作未成品・砥石も伴出している。また若干ではあるが、大東町内では初見の縄文土器(櫛現山式)も検出した。

又下遺跡では須恵器もかなり多く、蓋環の身と蓋の形状が逆転する時期以降の限られた期間のものであり、これと同時期の土師器が多い。特に赤く塗彩した高環・壺などや非実

用の手捏ね土器、ミニチュア高坏、また須恵器の高坏など非日常的なもののか、砾石・玉作未成品等もあり、角田・又下遺跡ともに攻玉に関与した集落の遺物であった。

このほかに注目すべき遺物として、又下遺跡からスラグが出土している。これがどのような工房或は作業に由来するものなのか、さらに検討を要するものである。

以上のような状況は、かつて調査された大東高校グラウンド遺跡に、立地のみならず遺物までも脈絡しており、特に角田遺跡は同一遺跡と言えるほどに酷似したものである。そして又下遺跡は、その後に続く内容のものであり、これらは5世紀代から8世紀に至る一集落の推移が想料されるものと言えよう。

これらの遺跡は、古代からの社である加多神社の麓にあって、平安時代には加多里と呼ばれた集落の中心地と推察される位置にあたり、出土した遺物からは攻玉工房が推察される集落跡である。

またこの地は古代からの玉作の中心地である玉造から鈴を越して直ぐの位置にもあたることから、古代における赤川中流域の主要な「忌玉作」のあったところと思料され、そして出土遺物はさらに多くの資料をこれに加えたことになる。

主な参考文献

- 『大東町誌』 大東町 昭和46年
『出雲国風土記参究』 加藤義成 昭和32年
『日本地名大辞典32巻島根県』 角川書店 昭和57年
『新修島根県史資料編1』 (出雲国計会帳・延喜式の項) 昭和42年
『雲陽誌』 (日本地誌大系・復刻本)
『さんいん古代史の周辺上・中・下』 山陰中央新報社 昭和55年
- 柳浦俊一「出雲地方の須恵器生産」『山陰考古学の諸問題』 昭和61年
清水真一「福市・青木遺跡」『えとのす18』 1982年
東森市良「安来平野における弥生終末期の様相」『安来高校研究紀要』 1987年
越岡法晴・川原利人「島根県における発生期古墳墓祭祀」『古文化談叢10』 1982年
宍道正年「島根県の縄文土器の研究」『松江考古』6.3
勝部 昭・西尾克己「尾崎島における祭祀遺跡の発掘調査」『季刊文化財第31号』 昭和52年
- 島根県教育委員会「島根市遺跡地図I」 1987年
- 松江市教育委員会「葛沢A・B・別所遺跡」 1988年
- 大東町行政文書「大東村字切図」 明治22年

付編Ⅰ 大東高校グラウンド遺跡

蓮岡法暉

1. 遺跡の発見

遺跡の所在する大東高等学校の校庭は、これまで5回にわたって拡張工事がおこなわれており、土器などが出土している。ここでは、工事の内容と遺物の出土状況などについて簡単に述べてみる。

大東高校は、昭和23年県立大東高等女学校から移管されたものであるが、移管当時校庭はなく、加多神社下の山沿いをはしる町道古城1号線から南西側の赤川方向には水田が階段状に並んでいた、赤川沿いに民家が並んでいた。

そこで昭和24年、学生の労力奉仕により第1期の造成工事がおこなわれ、校舎よりの水田を埋め立てて小面積の校庭が造成された。^(註1)この時は掘削がおこなわれておらず、遺物の出土はなかった。

つづいて昭和25年、第2期工事がおこなわれた。^(註2)町道古城1号線沿いの高い位置の水田を掘削して、赤川方向の低い部分は埋め立てた。この工事の掘削で土器がかなり出土したという。

さらに昭和27年、第3期工事がおこなわれた。^(註3)この工事も第2期工事と同じく、高い部分を掘削して、低い部分に埋め立てるもので、1.5mぐらいも掘り下げたという。この工事で、多量の遺物が出土し、大東高校校庭遺跡の存在が周知・確認された。

遺物出土の状況は、工事関係者、視察者の話によると概略次のようにあった。厚さ20~30cmの耕土の下に30~40cmの茶色系の粘土質の層があり、更にその下方が約40cmの黒色系の土層で、この土層から遺物が集中的に出土した。これより下方からは遺物は出土しなかったという。

出土遺物は、多量の土器と玉類である。土器は、土師器のみで、須恵器は採集されなかつた。玉類は、成品は極くわずかあつたが、碧玉の勾玉・管玉、瑪瑙の勾玉の各工程の未成品が多くまた玉材の剥片、玉磨砥石などがあり、鉄製の槌とおぼしきものも出土している。

造構は確認されなかつたが、遺物からこの遺跡は玉作りに関係した集団の集落跡であることが判明した。遺跡の時期については、土師器の型式から山陰地方の古墳時代須恵器Ⅰ期平行期で、当地方で須恵器が普及・一般化する以前と推定された。^(註4)

さらにその後昭和41年、第4期の拡張工事がおこなわれ、既成の校庭の西側で加多神社参道までの区域、約4,000m²が造成された。工事の方法は前回と同様であったが、遺物はほとんど出土しなかつたという。

2. 昭和49年の発掘調査の概要

最近の工事は、昭和49年におこなわれた第5期工事である。工事の方法は、既成の校庭のほぼ全域にわたって、北側の町道古城1号線寄りの高い部分を切り下げ、この土を校庭南側の区域に埋め立て、約1,400cm拡張しようとするものであった。工事区域には、昭和27年の遺物出土区域が含まれることから、遺跡の広がりなどを確かめた上で必要な事前調査をおこなうことになった。

そこで、校庭全域にわたり試掘調査をおこなったところ、北側で遺物包含層が検出されたが、南側では過去の埋立ての土砂があまりにも厚く遺構の存在は確認できなかった。このような試掘調査の結果やこれまでの工事の際の観察をもとに、発掘調査は南部・北西部をのぞき、北東部約900m²についておこなわれた。これが大東高校校庭遺跡についておこなわれた最初の発掘調査である。(P 5 図参照)

発掘調査の結果によると、遺跡の垂直構造は、概略次のとおりであった。第1層は、硬い埋土の層で、厚さは20~70cmであった。粗砂粒を含む真砂質の山砂で、過去の校庭造成工事の深耕土など上部の土を取り去った後に埋め立てられたものである。

この下の第2層は暗褐色の土で、10~20cmの薄い層である。過去の校庭造成工事などで削られ薄くなったり、消失した部分もあった。全体的に花崗岩のばいらん土を含み、遺物の出土は最も濃密であった。

第3層は、第2層に似た茶褐色土で、20~70cmの厚さがあり、おおむね東半分に認められた。粗砂を含み、第2層についで多量の遺物を含んでいた。

第4層は、灰黒色の粘質土で、20~40cmあり、茶褐色土の存在しない西半分では第2層の暗褐色土の下にある。上部から若干の遺物の出土がみられた。

第5層は、灰黒色の砂質土で、60~90cmの厚さがあり、西の方では粗砂粒を含む褐色砂質土に移行する。この層以下では遺物の出土はみられなかった。

第6層は、青灰色粘質土であるが、均質で乱れのないことなどから、基盤的な層であると考えられる。地表からこの層上面まで150~200cmほどであった。

調査区域の南東部分には、第3層の茶褐色土の下に砂層が認められ、3~10cm程の薄い層が何層か重なっていた。また北側中央から南北方向にかけては竹管が埋設されており、幅約1mにわたり第6層まで擾乱されていた。このほか、部分的に上下の土層が混ざり合ったり、ガラス片や陶磁器片を含んでいるところもあり、これまでの造成工事などの擾乱が推定されるところもあった。

以上土層などの観察を述べたが、結局遺構と考えられるものは調査区域内では検出できなかった。

次に出土遺物についてみると、ポリ袋（普通にいれて約3ℓの量のものがはいる）で約340袋分が出土している。ほとんどが土器で、ほかに玉類や石器類があった。

まず土器では、土師器がほとんどで少量の須恵器などが認められた。須恵器は、蓋・壺・甕などが確認されており、多くが山陰の古墳時代須恵器のⅠ期に属するもので、わずかにⅢ期以降のものがあった。土師器では壺、甕、高環、器台などがみられた。壺、甕では、口縁外面に巾広い平面を確保する有段口縁のもの（A）が多いが、この退化形態と考えられる口縁下方がふくらみ「く」字形に屈曲するもの（B）もみられ、また単純に短く外反する口縁のもの（C）もある。これらは球形あるいは倒卵形気味の胸部をもち、底部はいずれも丸底である。高環は、環部外側に段を有し、脚部は裾が屈折して大きく開くものの（D）が主であるが、环部に段がなく外反気味に大きく開くもの（E）も若干ある。器台はあまり多くないが、すべて鼓形器台である。ほかに塊・盤・壺形の手捏土器がある。

土師器で、壺・甕の（A）有段口縁のものと高環の（D）环部有段のものは量的にも顕著で、本遺跡の標識的な土器となっているが、これと壺・甕の（B）「く」字形口縁のものや鼓形器台を含めた組合せは山陰地方の古式土師器の編年の中で最後の段階に位置付けられる大束式と呼ばれることがあり、時期については山陰地方の古墳時代須恵器Ⅰ期に平行する時期が含まれるものと考えられる。また壺、甕で（C）單口縁のものの中の口縁端がのみ状にうすくなるものなどや高環で（E）环部無段のものは、同じく須恵器Ⅲ期平行期のものと考えられる。

玉類についてみると、玉材は瑪瑙がわずかにあるがほとんどが碧玉である。種類は、勾玉と管玉で、成品も少數あるがほとんどが未成品である。未成品は、形割未成品が多いが荒削未成品、研磨未成品もかなりあり、穿孔で失敗し廃棄した品もある。

本遺跡の性格については、すでに昭和27年の工事の際の出土遺物から玉作に係わる遺跡ということが判明していたが、昭和49年の調査で、玉類は調査区域内においてかなり普遍的に出土し、玉作を専業的におこなっていた集団の集落跡であると判断されるにいたった。また遺跡の時期についても昭和27年段階において、山陰地方の古墳時代須恵器Ⅰ期平行期で、当地方で須恵器が普及・一般化する以前と推定されていたが、昭和49年の調査においても、本遺跡の中心の時期は須恵器Ⅰ期に平行する時期を含むことが確認された。

註1 「大東高等学校六十周年誌」(昭和57年4月15日刊)（以下『大東高誌』という）によると「県道西側1反7畝」とある。

註2 「大東高誌」によると「1反」とある。

註3 「大東高誌」によると約3,000m²である。

註4 山本清『島根大学敷地兼師山古墳遺物について』(『島根大学論集(人文科学)第5集』昭和30年2月刊)。(山本清「山陰古墳文化の研究」所収)

付編Ⅱ 輪の内遺跡

昭和49年2～3月発掘調査

服部 昭・宮沢明久

この遺跡は大東高校グラウンド遺跡の続地にあり、校庭拡張に伴う部分的発掘調査である。付近の水田やA・C区から古式土師器を採取。

A区 地山面は流失。泥炭状で南寄りに溝遺構。

B区 西、加多神社参道寄りに建物柱穴2個(間隔200cm)。他にも2～3柱穴あり。

C区 建物跡3棟分あり。S B 1は3回以上建替あり。この区では弥生土器・丹塗高杯採取。

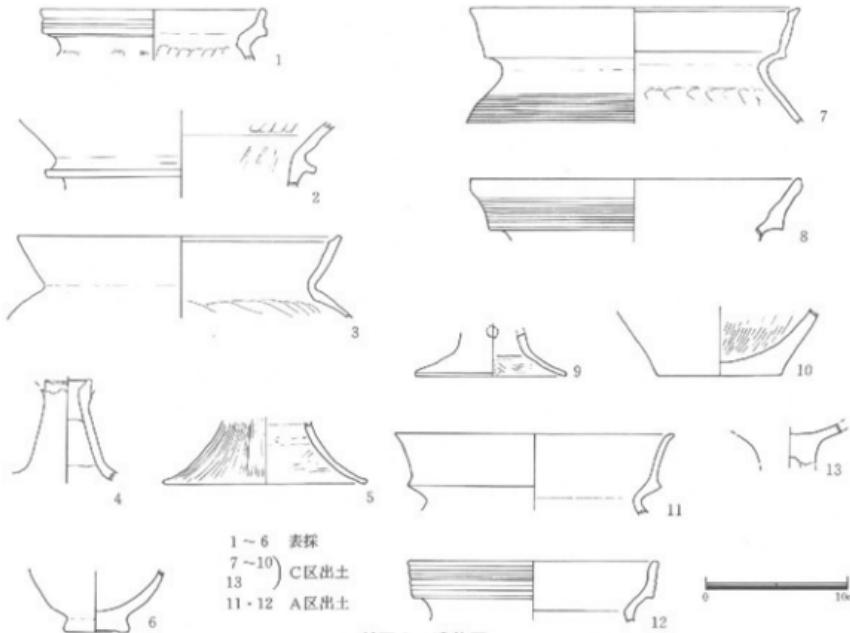
S B 1 235×255cm 187×187cm 200×200cm

S B 2 東西 235cm 南北 230cm

S B 3 東西 250cm 南北 200～205cm

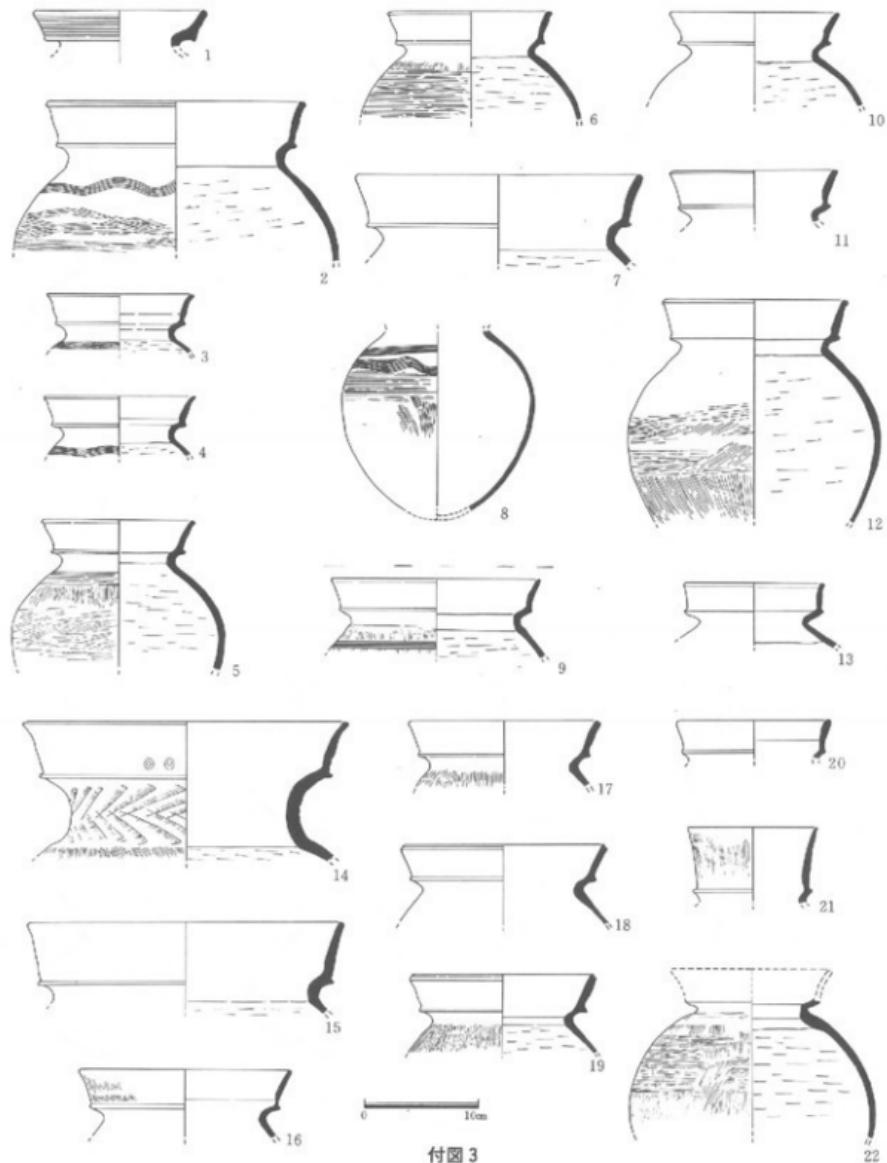


付図1 遺構図



付図2 遺物図

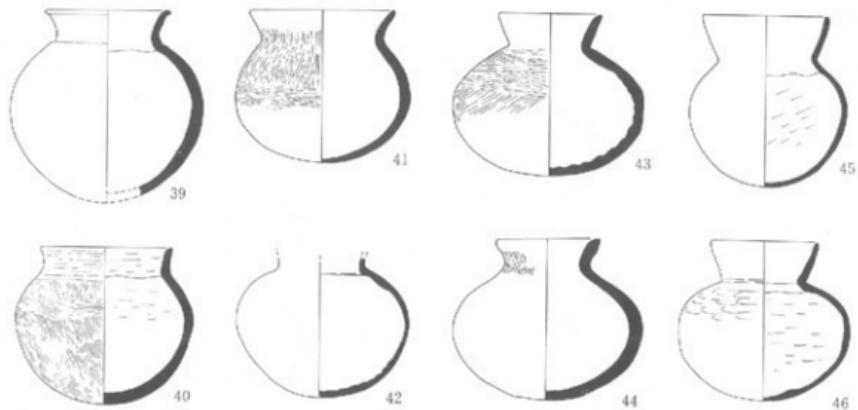
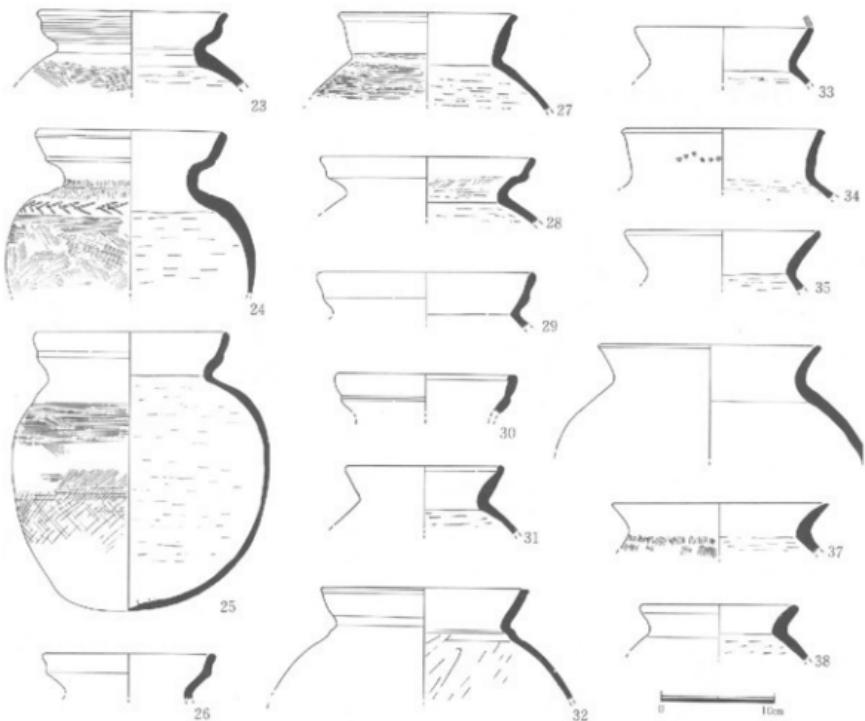
付編Ⅲ 大東高校グラウンド遺跡出土遺物 —おおむね昭和27年～49年出土のもの—



付図3

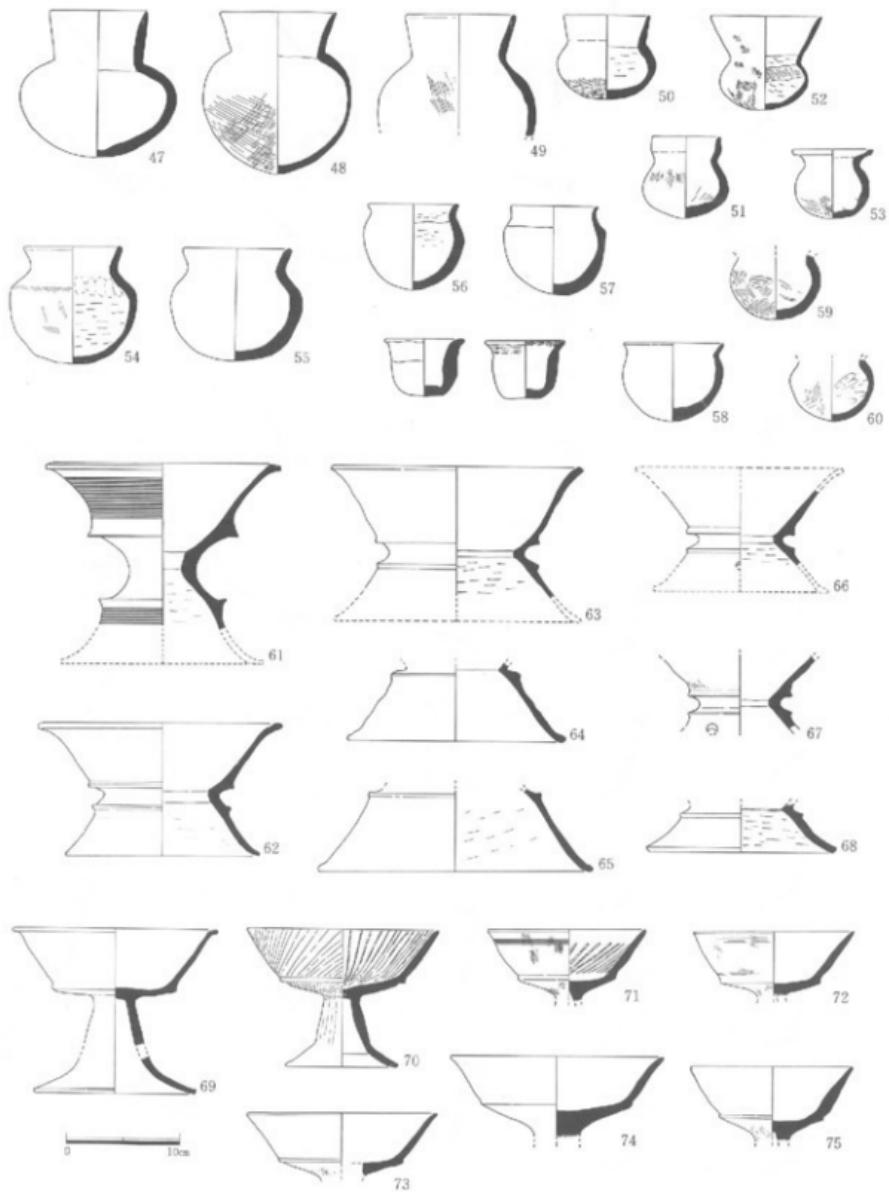
— 55 —

1. 弥生式土器 2～22. 土師器



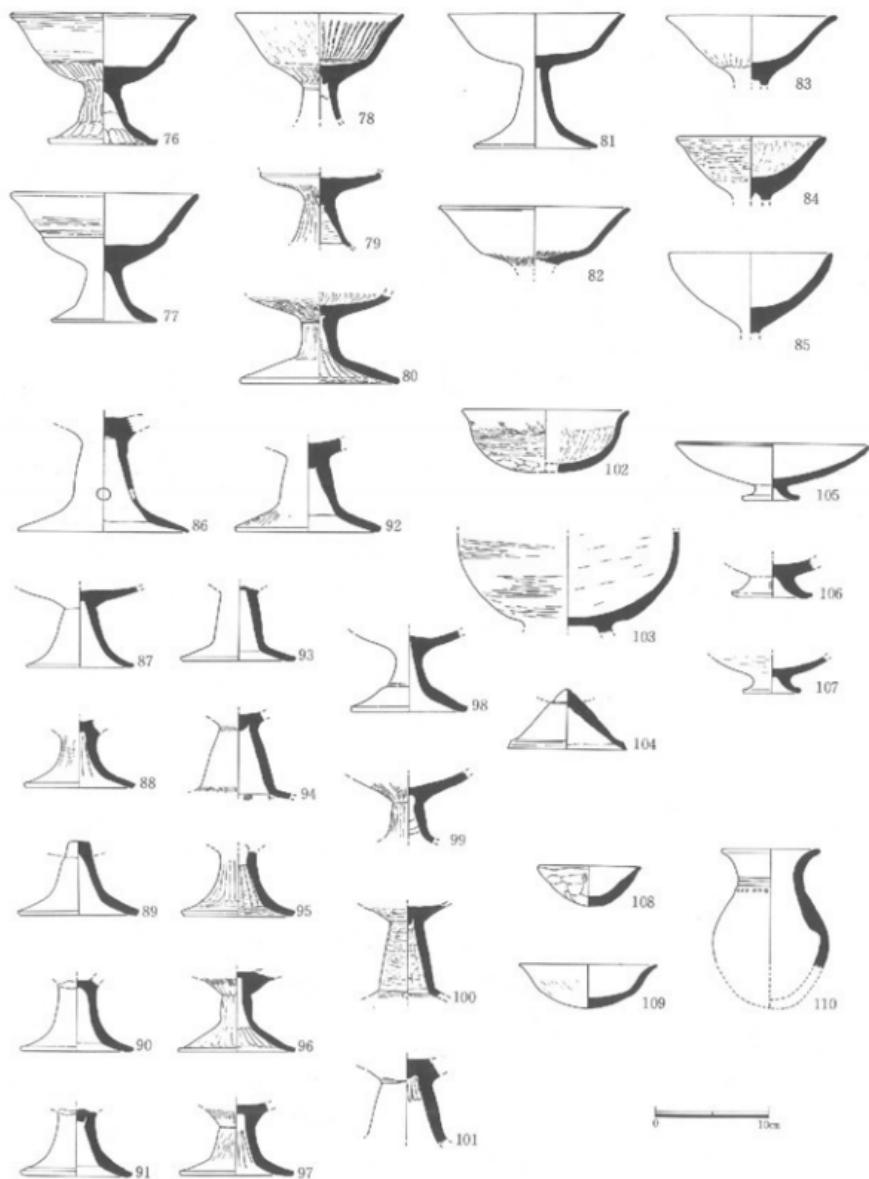
付図 4

23~46. 土器



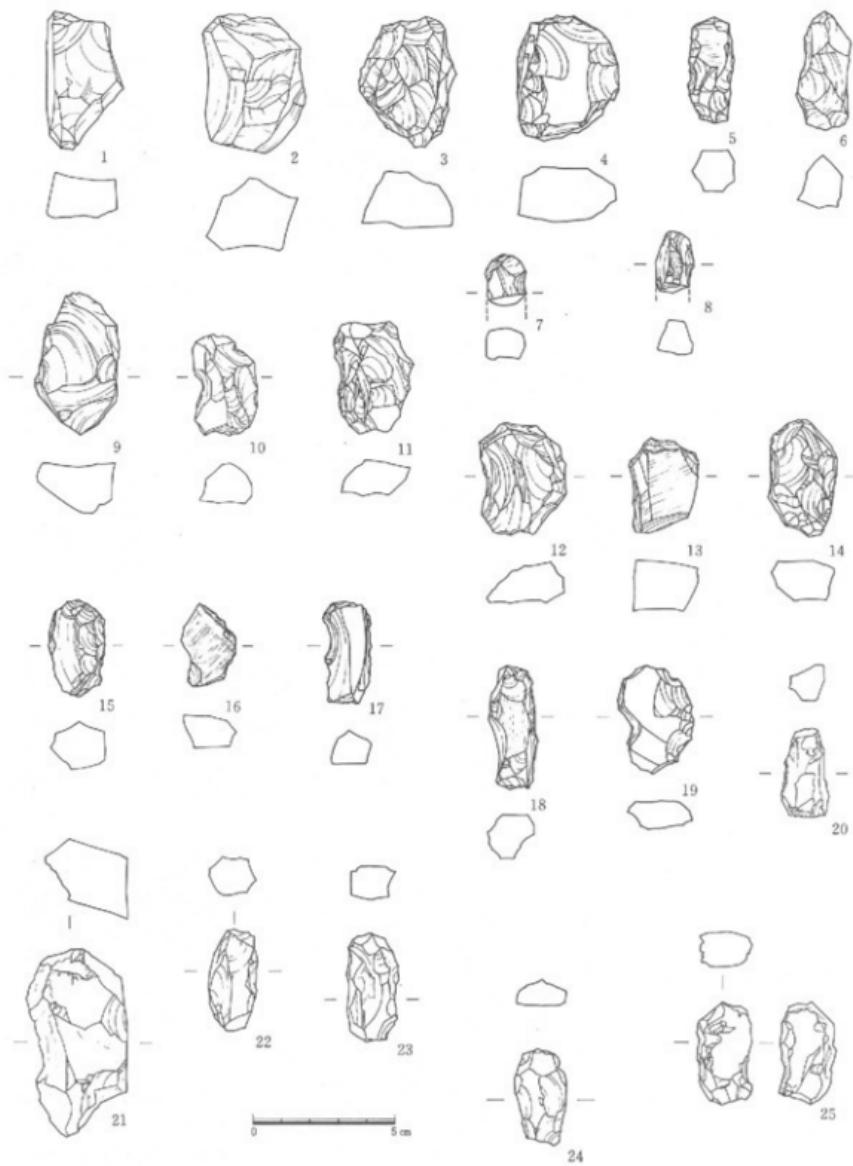
47~75. 土器

付図 5



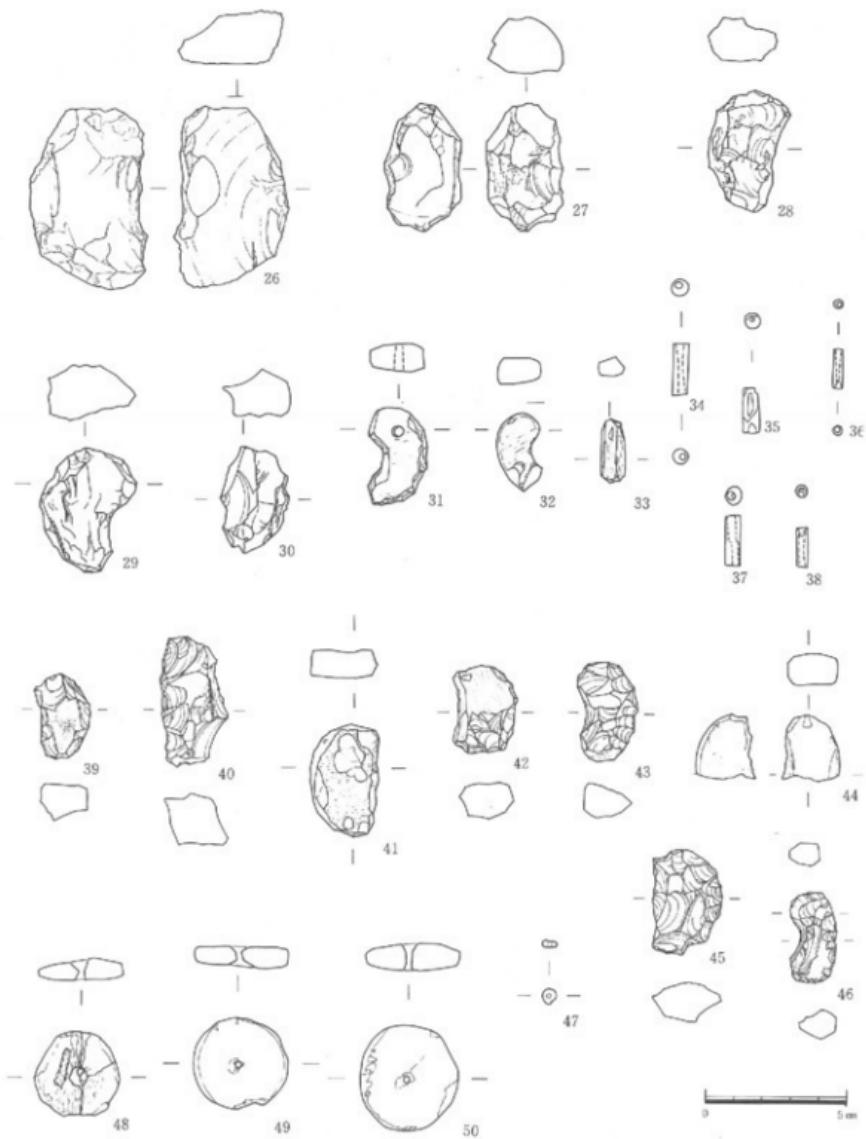
79~110. 土器器

付図 6



1~25. 碧玉製

付図 7



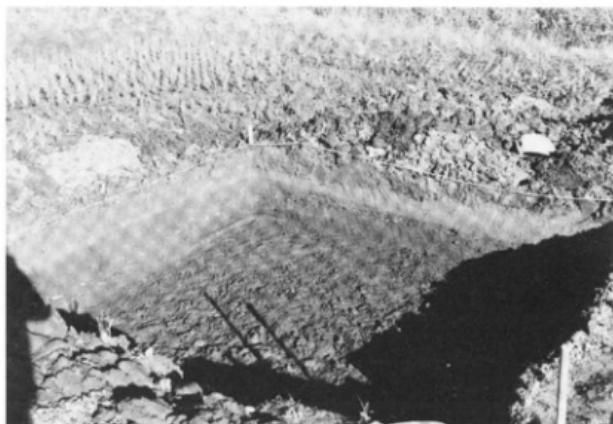
26~38. 碧玉製 39~46. メノウ製
47. 滑石製 48~50. 滑石製有孔凸板

付図 8

(東森市良、宮沢明久、蓮岡法暉 提供)



角田遺跡全景



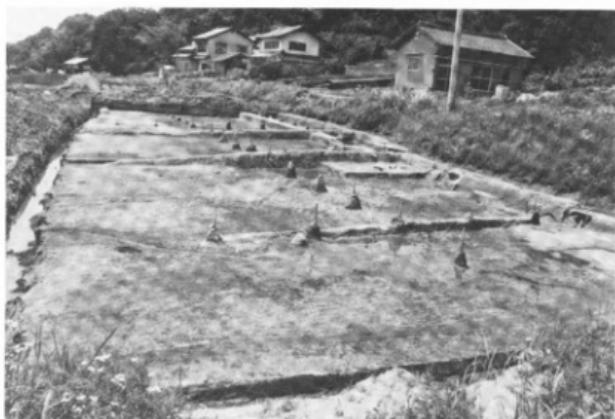
I-1グリッド



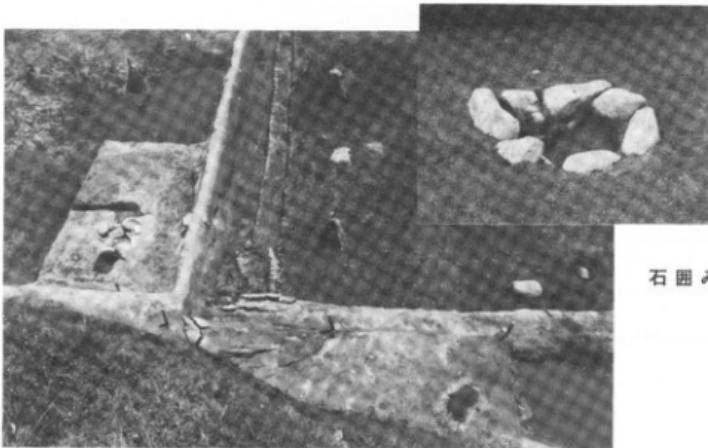
発掘風景



高校生も加わって.....



全 堀 後 の 状 況



石 囲 み 柱 穴



遺物の出土状況



遺物の出土状況



遺物の出土状況



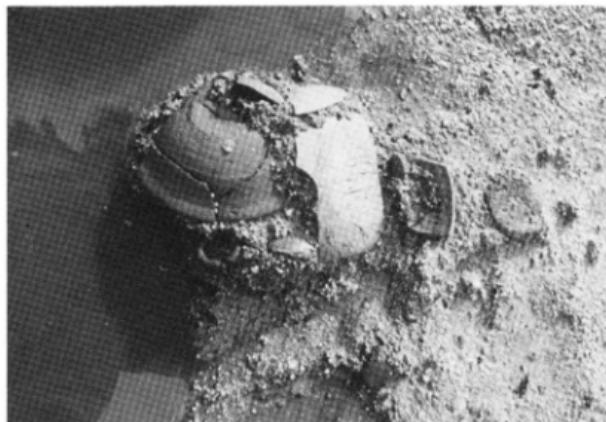
又下遺跡遠景



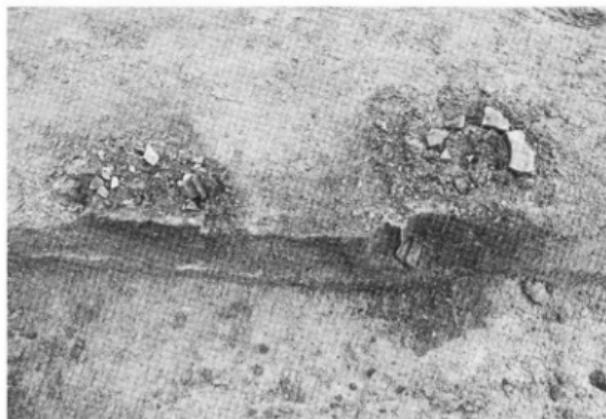
勾玉、碧玉片出土狀況



土師器把手、土製支脚、
黑曜石片出土狀況



須恵器、耳環の出土状況



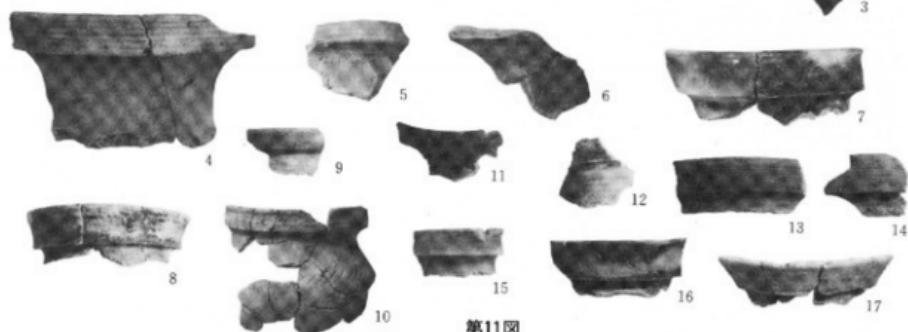
柱穴ピットと
古代土師器の落ち込み



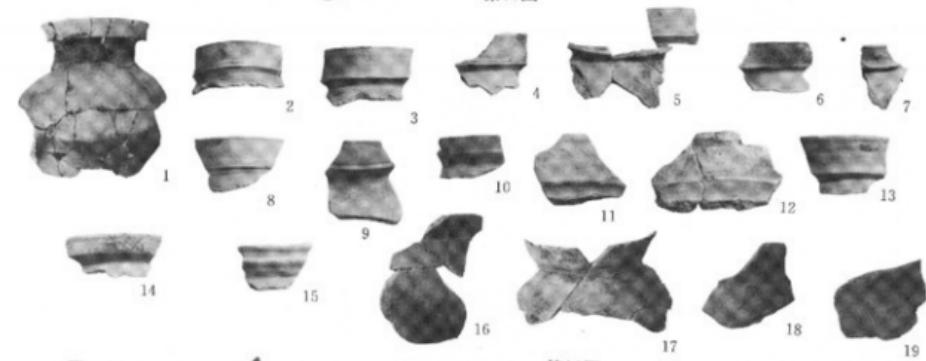
遺物の集中散布状況



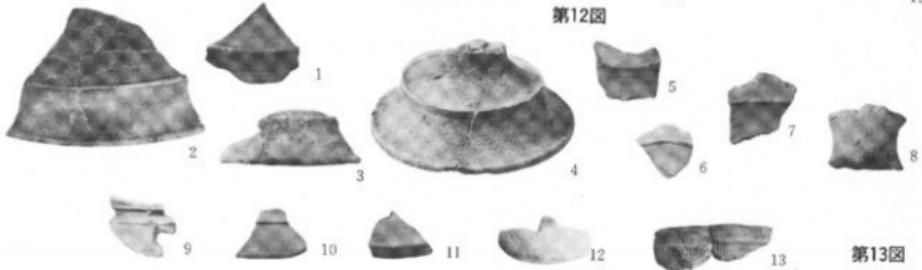
第10図



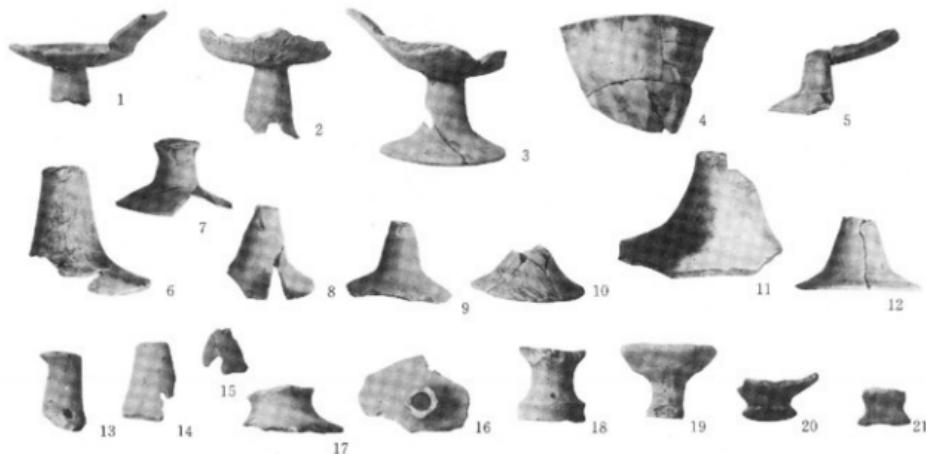
第11図



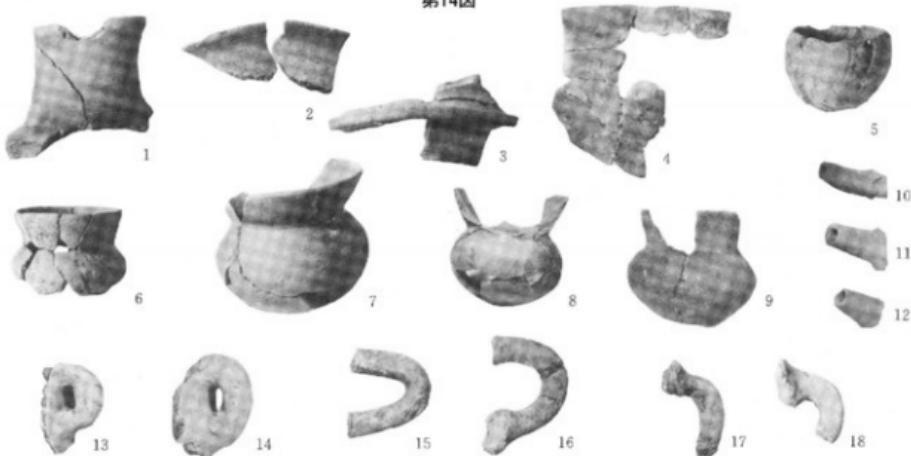
第12図



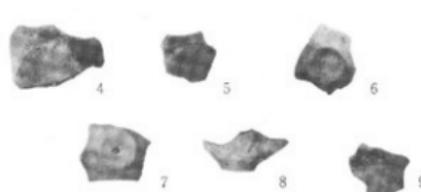
第13図



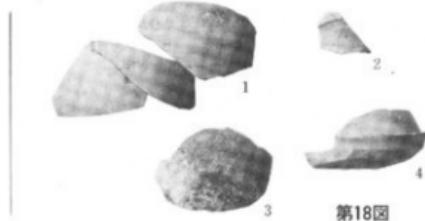
第14図



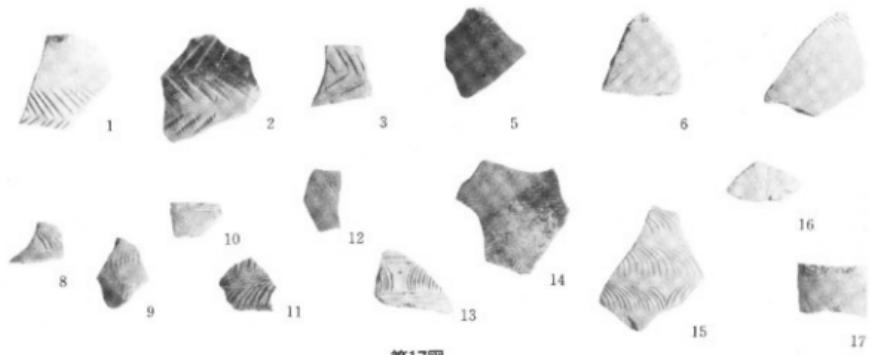
第15図



第16図



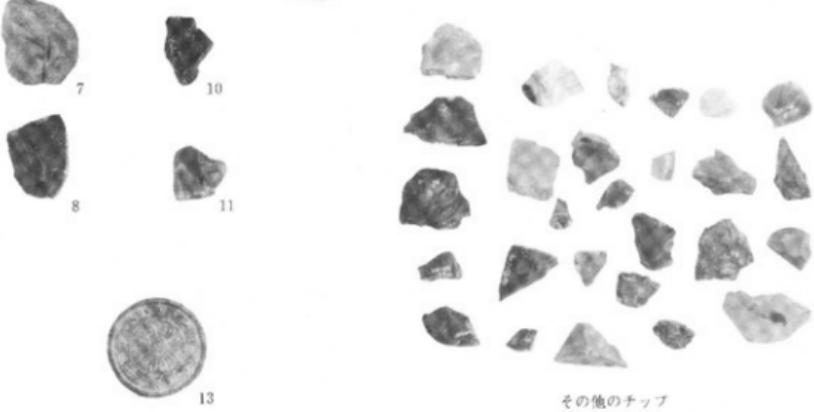
第18図



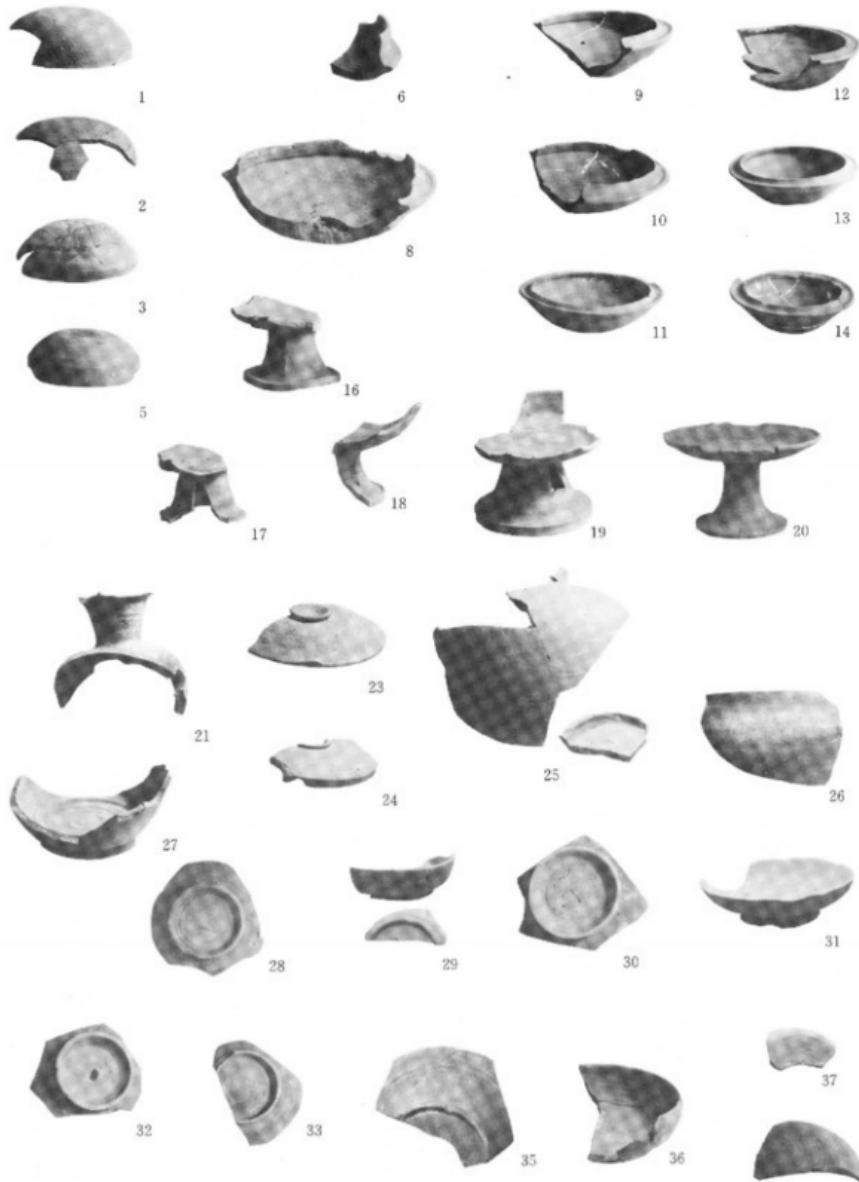
第17図



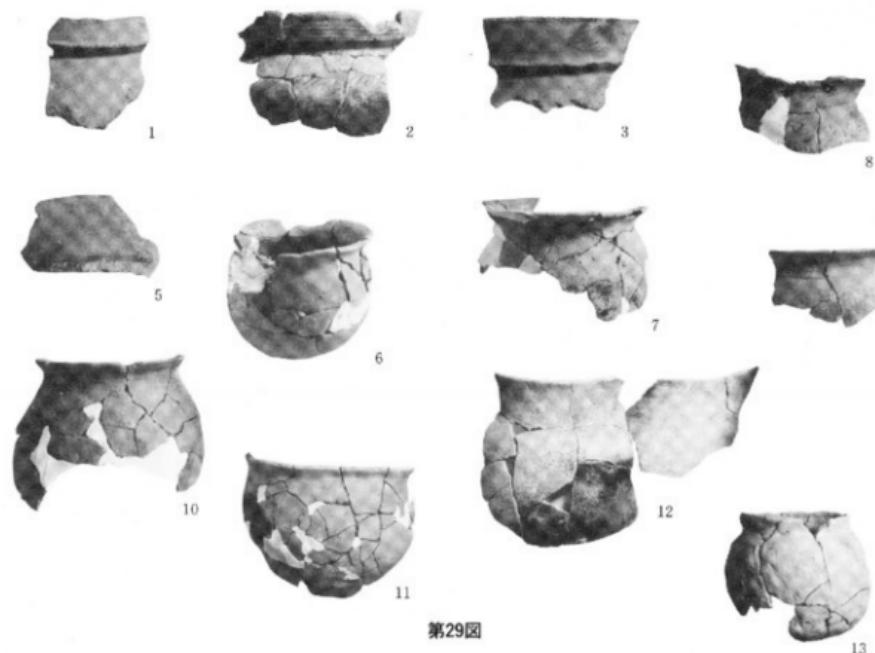
第19図



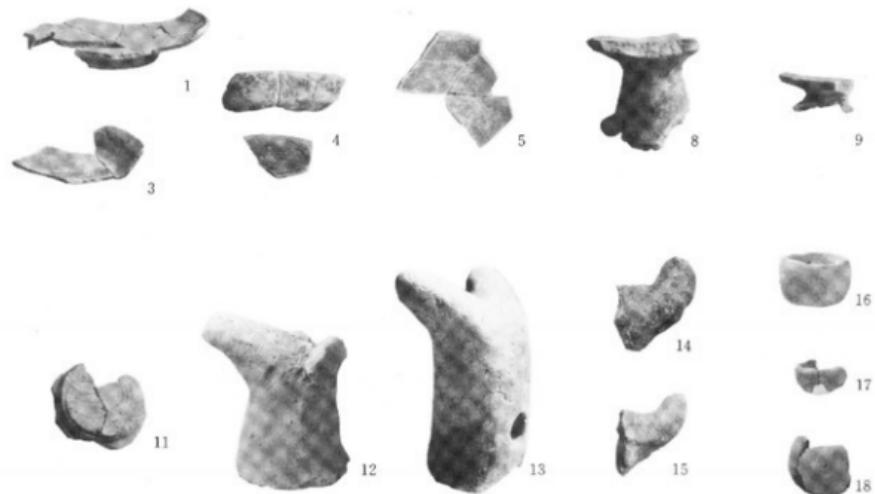
その他のチップ



第27・28図



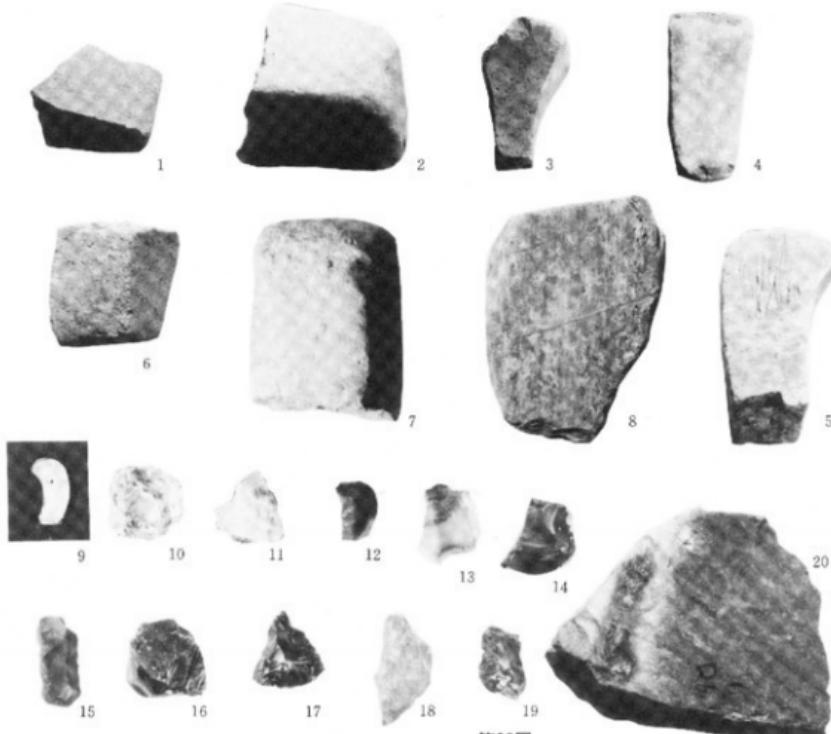
第29図



第30図



第31図



第32図

大東高校校地扯張に伴う発掘調査報告
角田遺跡・又下遺跡
付 大東高校グラウンド遺跡他資料

1988年3月

発行 大東町教育委員会
島根県大原郡大東町大字大東1673-1

印刷 曽田印刷
島根県大原郡大東町大字大東765

